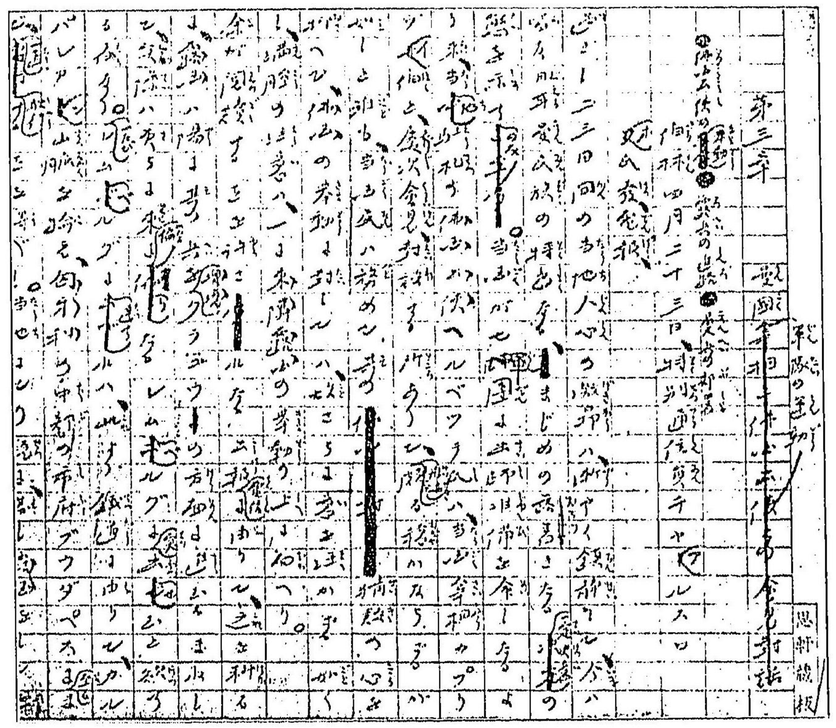
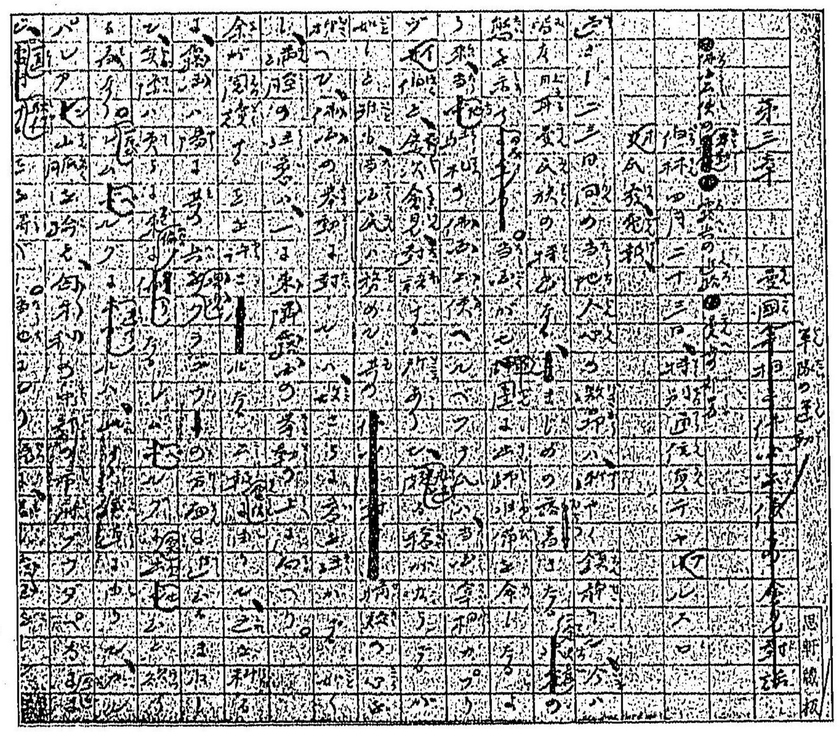


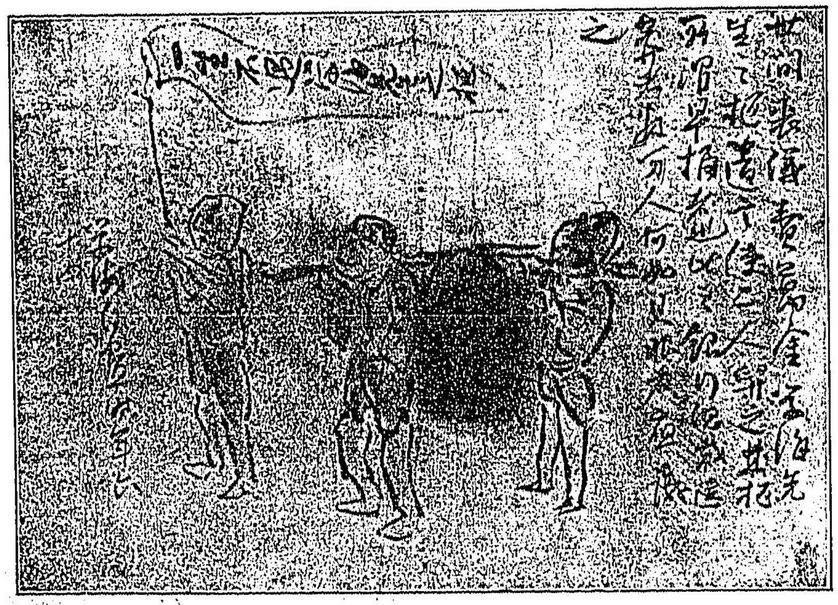
森田思軒君草稿

依田學海先生戲畫

小川一眞寫眞彫刻銅版及印刷

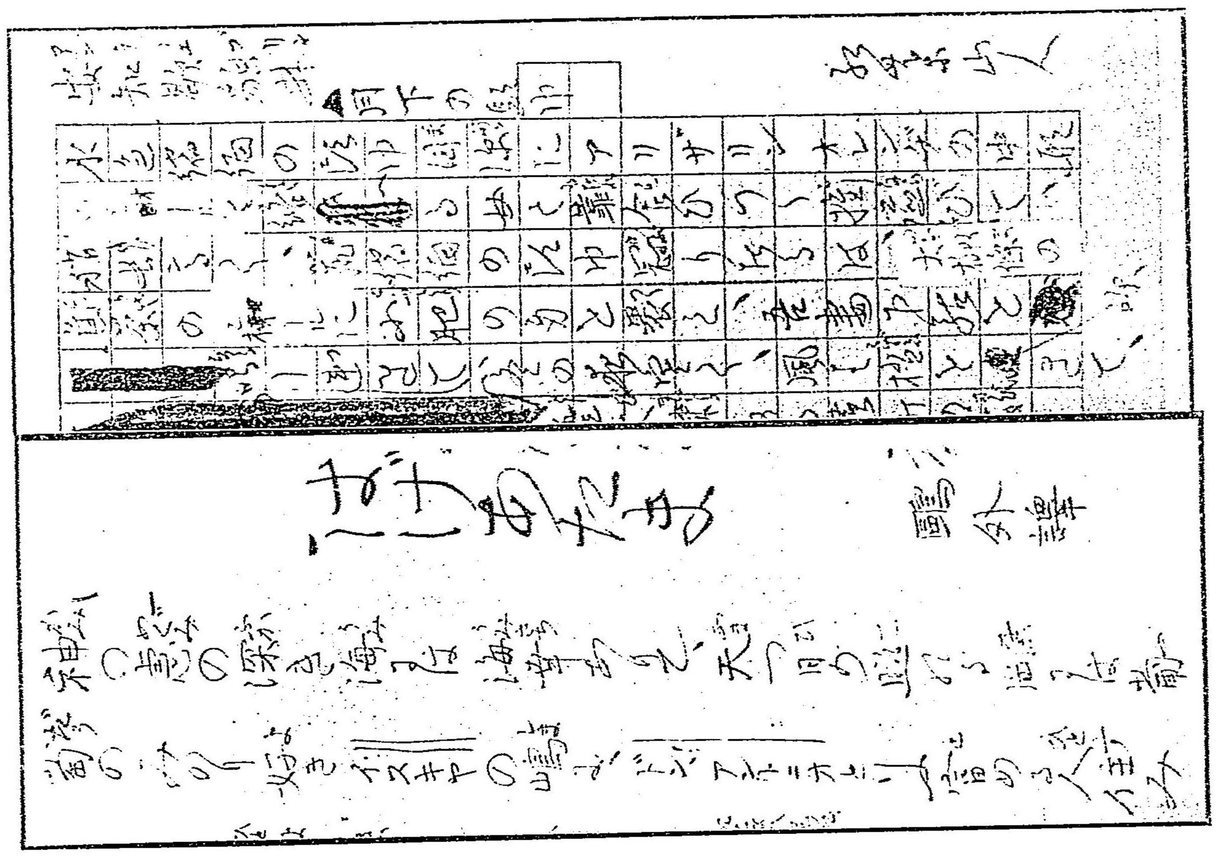


森田思軒君草稿

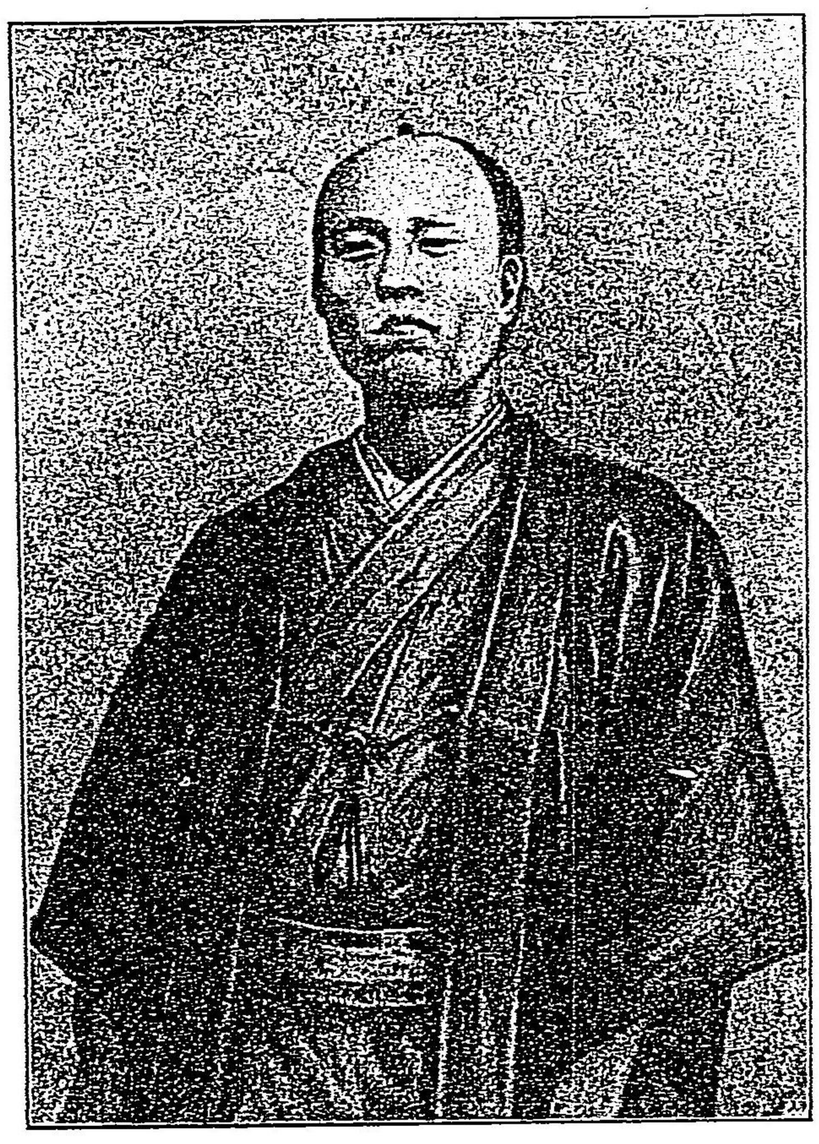


依田學海先生戲墨

小川一眞寫眞彫刻銅版及印刷

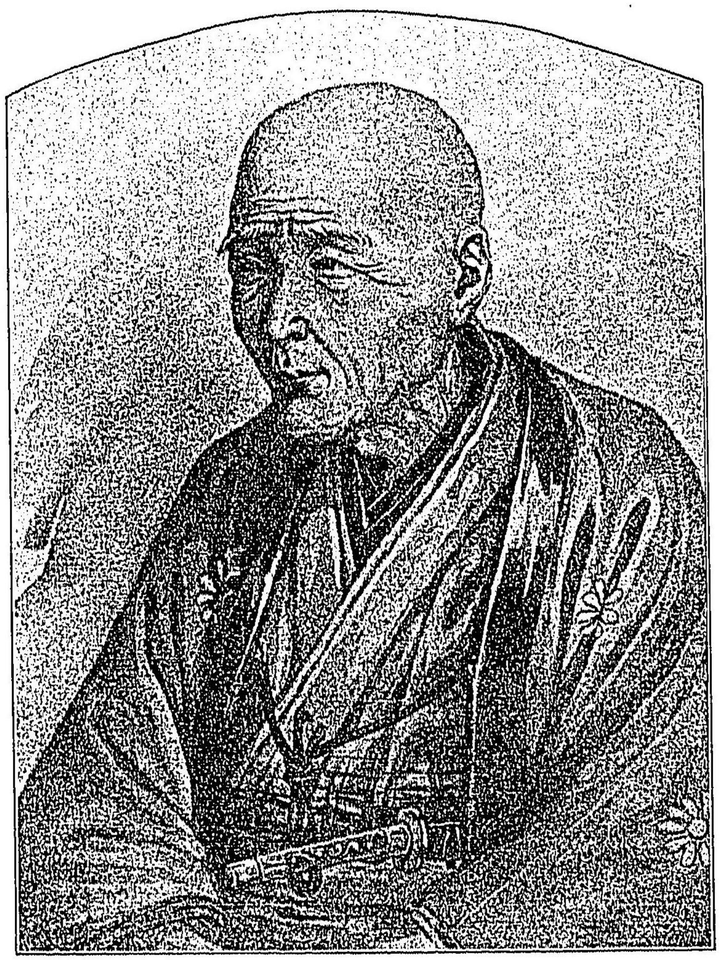


現今の福澤先生



三十年前の福澤諭吉君

小川一眞寫眞彫刻銅版及印刷



曲亭馬琴之像

山東京傳之像

十返舍一九之像

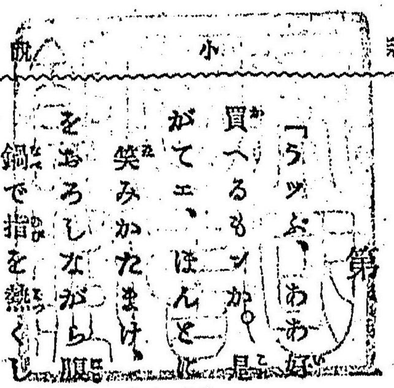
柳亭種彥之像

式亭三馬之像

新小説第貳年第四巻

可憐狂

山田美妙



「うッぷ、あゝ好い心もちに酔ッた。あッゝ千兩万兩一万兩、金で此心もちが買へるもンか。是といふのも娘の御かげ、やッぱりそれが旦那の御かげ、ありがてエ、ほんとに有りがてエ、ね阿定。」

笑みかたまけ、酔ひどろけて居る六十ばかりの老人、そろそろ焦げ付く鳥鍋をゆろしながら腹の中をば思ふ存分。

鍋で指を熱くして、あわてゝ耳へ遣りながら、「あッつ、うぷ、好い心もちだ。どうだ、阿定もう一度見てくんなよ、なッ、この寫眞をよ、よッ乃公の娘のこの寫眞をよッ。」

阿定と云はれたのは五十ばかりの老女で、老父には妹に當ッた。にやりにや

りと笑ひながら、

「見たよ、もう澤山。」

「ちッ、薄情な事を言ふンねェッ。折角言ふのを、義理ぢやねェか、さうかてッて見てくれたッて可いぢやねェかよ。見ねェ、なッ、こりや阿今が十八の時の寫眞だ、花ざかりの時御庭の中でうつしたッだ。」

「ふふふ、知ッてるよ、聞いてるよ、ぶッ、くどいねェ。」

「何イ、くどいッ？」と目を据ゑて、舌で淡鹿を舐めながら、

「だから御めへは素氣ねェといふンだ。燈心の寒ざらしぢやあるめェし、寒ざらし嬢といふンだ。人ッ、これでも女人か知ら。」

「きまりだ、酔ふといつでも。へッ、それぢや押見いたしましやう、御むすめどさまの御寫眞さまを。」

「寫眞へ樣を付ける奴が有るけッ。」

「うれしがるだらうと思ッてさ。」

「そのくれをなら御むすめどさまの方へ二つ付けろイ。」

「抜け齒で舌がまはらないよ。」

「あんまり親の脛をかぢつたからだ。」

「ちよッ、御きげん取ッたり、わるく云はれたりしてこんな埋らない咄しは無い。」

「死んだら墓へ埋めてやちァ。」

「御禮からさきへ申しますよ。」

老父太右衛門すこしくしよげた。にこりにこりと頼れるほどに笑ひながら、

「だけれどもな、阿定、親身ッてへものは好いものさなァ。己だつてもう嗅はなくなる、頼みにするのは御前と阿今の二人きりだ。それでもな、あの阿今がな、仕合はせとあのとほり好い旦那をふんづかめ（たので、このとほり己だつて、此畑草屋まで出してもらひ、暑くなく寒くなく左團扇で氣樂に今日を送ッて行けるンだ。ありがてェぢやねェか、おい。」

「そりやまつたくさうだとも。何しろあの娘も感心さね。よく若いのに見とめを付けて堅氣になる氣になつたものさ。兎角あんな商賣したものは尻が落ち着

かないものでね。」

「と言ひなさんな、おい阿定」。

「え、何。」

「何ぢやねエ、そりやあんまり情ねエ言ひ草だ。」

「へエ、なぜね。」

「そりやわが子で褒めるンぢやねエけれども、あれに限ッちやそんな浮ついた心はねエンだ。」

「だからさア。」

「へン、いやにごまかしやがるッ」と笑ふ。

「ごまかすンぢやないやね、前からさう言ッてるンだてね。だけれどもね、御前、それがあの子ばかり良いンだと思ふとまちがいだよ。あの子もはたらき者で怜悧さ、けれど又旦那も旦那だからね。」

力を入れて、「そりや已だッて知ッてらァな」と卒然として涙ぐむ。

阿定ただ何となくびりびりと感に撲たれて、挨拶も一寸出ない。

「そりや知ッてらァな」と太右衛門たたみかけた。「そりよ忘れたら人間ぢやねエ。そりや阿今を氣に入つてればこそ已までを斯うまで爲てくれるンださ。だが、それが氣象に因るンだからな。かまァねエからッて仕方ねエやうなもンだ。そりよ有りがてエと思はなかッた日にや畜生だ。何忘れる、忘れるもンかッ。是だッて年は取つたッて飯も六杯づゝも食ふ已だ。わるい事を厭ふンぢやねエが、今にも旦那が病氣で腰でも抜けたら、すぐ駈け付けて差し向き已が泄脱の世話ァするからなッ」。

「きたない事をたのしみに御しでないよ、人ッ面白くもない。」

「それから不動さまへ願かけらァ水垢離取ッて。うれしいな。」

「うれしいも無いもンだ。」

「だけれどもよ、さうして恩でも返さなけりや恩けへす事ァあるもンか。煩ッてくれるのも可いや、くるしくなく。」

「ぷッ。」

「それで素性よくはやく治ッて。」

「いやだよ、本當に、くッたらない事を。それよりか頻ふところも頻はないやうに厭ふのが本筋ぢやないか。」

「それも厭ッてるンだいッ」と忽ちにしてむんみりとして、「御前だけに言ふ、己、己、實は其な。」

「どうしたの。」

「どうッて事もねェンだけれど、己、己、はやく死ぬンだよ」。

「なン、なッぜ。」

「わらッてくれるなよッ、ちッ、己、生命を定命の内から十年だけ不動さまへ獻げたンだ。」

「そりや又なぜさ。」

涙さすがに催ほして、「だッてもそれが切めてもの御恩げへしと云ふもンだッ。ちッ、有りがてェ旦那、只ぢや己にや恩がけへせねェや。だから己の定命の内から十年だけを取ッて、それだけを旦那と、うふゥ。」

「泣いちゃ身躰に障るのにさ。」

「障らねェやうに泣かいッ。」

「その恩命をどうだッて。」

「旦那と阿今とに遣りてェので。」

阿定もたまらず袖を顔。

「十年ばかりの命、二人で別けて幾何にもなるめェやさ。だけれども、己だッてもう五十四、ちッ、いくら殘餘が有るもンか。それにや零餘をすこし殘して、ちッたァ己だッて安樂に婆婆に居てェやさッ」と一句毎に聲を呑む。

それほどに惜しい生命を割愛しても恩人へ遣りたいのかと阿定全身總毛起つ。

「信心もそりや無理、無理なッ。生命なンぞ縮めないからッてさ。」

儼然として、「でねェッて事よ。まだまだ己が吝嗇なンだ。十年が十年全つきり旦那へ獻げるのが順當ださ。だけれどもよ、よッ、それぢや阿今に何にも行かず、己が餓鬼だッ、かはゆいやさ」と又さめざめと泣き入つた。

「氣ちがひじみた事を御言ひで無いよ」と阿定やがて改まッた。「それほどに恩

ふのはそりや結構さ。旦那はじめ阿今が聞いたら嘸まァ嬉し……」

「言ふンぢやねェぞ」と目を睨る。

「いいえ、言やしないが、まァさ。嬉しがるだらうと云ふのさ。」

つくねんと太右衛門下を向いて、ぽろりぽろりと黙つて泣く。阿定もほとんど身を斫られる。

「だがさ、御前そりや無理な信心だよ。不動さまだッてそんな無理言はれて——第一人の壽命をつめるなンて。」

「馬鹿言ひねェ、暴神さまだ。」

「よしんば暴神さまにしたところがさ、人の壽命をつめるのが神さまの本意ぢやない。それほど御前が旦那のためを思ふなら、その思ひ一つだけで旦那の身の上に歹い事は無くなるからね、信心も物に因る、そりや御前あンまり勿躰無いといふもンだ。わるい事は言はないからさ、ほんとにそんな信心は廢しに御爲、ね、御前だッて身寄りが無いと云ふンだらう。まて見りや私だッて親身の兄ッてへのはお前ばかりぢやないか、見す見す壽命をちぢめるのをああ可いわと云ッて居られるか居られないか、ちッたァつもッても御覽なねェ」と至情の涙の袖を絞れば、

猶無言でぽろぽろと泣く。

「凝り性で正直過ぎるから困るよほんとに。不正直よりや可いけれども、さうまで深く思ひつめりやッぱり身躰の毒ぢやないか。つまらなく凝り過ぎて、あたしたちまでを、泣かせてくれないでも。」

咽び入れば、手をあはせて、

「うム、わかつたよ、わるかつた。つひ唯思ひつめたもンで。よッ、わるかッた、わるかッたよ。」

途端戸外にがらがらといふ人力車の音がする、と思ふ間、ぴたりと止まッた。

おや自家か知ら。

「ちよいと、おとッさん」と云ふ聲は意外わが子の阿今ので。

太右衛門飛び出した。

「ふム、阿今か」と云つたばかり、不圖見ると是は又妙、人力車は合ひ乘りが

二盞に一人のりが一盞で、その一人のりに阿今が乗ッて、他のには荷が積んである。

一目見て何と無くぞッとした。

「どうしたんだッ」と思はず怒鳴ると、同時に阿定も飛び出て來て、是も荷を見て怪訝顔。

「今ちやん、これは何うしたの。」

「なに今ゆッくり咄すからね、はばかりさま。どうぞ取ッて頂戴よ」と云ふ顔の色が平常で無い。

酒代の御利益だけの御餞儀をして人力車夫は歸ッて行く、阿今やがて座敷へとはる、太右衛門只おどおどして、坐るが否や、「どうしたンだ。」

「どうもかうも無いの、本當に」とおれッたさうに云ふ阿今の眼に見る間涙がさしぐんだ。

聞かぬうちから太右衛門胸を衝かれて、

「早、早く言ひねェな。どうしたンだ、喧嘩でもして來たのか。おいッ、これッ、だまッてちや解からねェ。よッ、どうしたンだ。」

「あたしやくやしいッ」と泣き出されて、思はず一所に泣き出したい。

「まッ、何がよッ。」

すこし離れて居た阿定も我を忘れてするするッと火鉢の傍へ擦り寄ッて、

「氣ッなるねまア。どうしたのッ。」

「聞いとくれよ、おとッさんも、伯母さんも。ちッきしやう、人をッ、人をッ、厭きちまやがッて、とうとう終尾にこんな目にッ。」

「且那が御前を厭きたのかッ。」

「そ、さうだよ。」

「なぜ又厭きられたンだ。えッ、なぜよ。又御前何かわるい事でも。」

「そんな事が有るもンかね」と涙一杯の目で睨みつけた。

「はいッ、さうでもねェのか。で、どうだッてンだ。よッ早くよ。」

「聞いとくれよ。」

「聞いてるよ。」

「くやしいぢやないか、ほんとに。」

「ほム、くやしいかなッ。」

「旦那の畜生、此頃女をこさへたもンでね、何でも人に批難をくッつけて逐ッ出さうと思ッて、あゝくやしい。」

「女をッ、ひッ、ひッでェな。」

「盗者だよ。」

「どこの。」

「馴町の。その女にすッかり熱くなッてね、有る甲斐無しにあたしを爲るの。さうでもない、一人の親まで過されて居るンだからすこしぐらゐの苦しみは辛抱してと思つてね、蔭で泣いちや外面であやまッてね。」

「阿定だまッて泣き出すと、太右衛門切齒をはじめ出した。

「するとその女の入れ智恵だらう、とうとう妾に難癖つけたの。」

「何だッて。」

「ちッ、くやしい。」

「言ひねェやさッさと。分からねェ。難癖の次第ェに因ッちや己にも了簡が有らァ。どうだッて。」

「あたしがねェ、生眞向目で居りや手の付けやうも無いもンでね、とうとう御前、あたしがねェ、旦那の目を忍んで役者かひをしたと言ひ出してね。」

「役者、誰ッ。」

「誰ッて御前咄しになりや爲ない。まるッきり根も葉もない事なんだもの。ほんとに濡れ衣とも何とも言ひやうの無い事ちやないか。それだのに、さうだッて、いッくら別譯しても聞き入れず、片時も家へ置くのは否だから身のまはりだけ持ッて出て行きやがれッて、ぐづぐづしてりや夫こそ怪我でも爲かねやさないンだもの。」

「熱ッ」と太右衛門仰山に叫び出す。さすがに一同びッくりすると、

「五徳へつかみついたやいッ。」

「火傷したかえ」と阿定があわてれば、

「かまァねェ、何でもねェ。それどころか肝心の咄しだいッ。」

火傷の涙と口惜しなみだと一所の涙を溢れさせて、

「何ぼ何でもそりや旦那が無理だ、無理だとも大無理だ、なッ、さうぢやねエか」と阿定を見やッて、「否なら否で可いや、何も難癖付けるにや當たらねエ、是だッて人一人の娘だッ。ソでッ畜生、ふんとにッ、馬、馬鹿にするも大概にしやがれッ、けたものめエ。」

「いはれを聞いて見りや」と阿定が割り込んだ。「小腹の立つ咄しさ全く。」

「小腹どころか大ばらだッ。」

「だが、おとッさん、又よく考へて見なけりやならないよ。」

「何、何をッ。」

「この子の前で言ふのは變だけれども、偏言ばかり聞いて嗙り立つのも揣まり過ぎる事ぢやないか。」

「そりや伯母さん」と阿今きつとなる。「うらみだわ夫や。なんぼ私が浮氣な家業をしてたからつて。讒言を吐いたつて今更はじまりや爲ない。有り躰の事を有り躰に云ふのに、さう云はれちや猶くッやしいッ」と泣く。

太右衛門だまッて、火傷の指を吹いて居たが、阿定の注意はたしかに胸に浸みて居た。

「だが阿今、ちッ、又癇を起こしてふるへてやがら。そりや阿定の言ふ事だッてまんざら歹くばかりは聞かれねエや。」

「可いよッ、もう御前まぢもッ。」

「でねエさ。あの家業で居る内に役者かひで新聞に出された事も無かァ無かつた。だもの、全つきり形無しとばかりや一寸思へねエや。」

阿今さながら狂氣の如く、

「くッやしいわ、どッ、どうしやうッ。親にまでこんな事言はれて、ちえッ何たるまナ口惜しいッ。何ぞと云ふと一口まぜにあの家業して居たなンて、誰のためにその家業したンだいッ。」

氣の毒さうに、「そりやさうさ。」

「何がそりやさうだいッ」と罵り飛ばす。太右衛門阿定だまッて顔を見合はせた。

「堅氣ンなりや堅氣だ。いつまで商賣してた時の氣を有つもンか。人の氣も知らないで、ふんどに、あン、あンま……」

「按摩、何」と眞顏で聞く。

「あンまりだつてンだよッ」と金きり聲。「可いよもう叫さないよ、言はないよ。力ァ付けてくれやうとも爲ないで、人ッ、どつちの最負するンだか分からない者に叫したつてどうなるもンか。」

「これさ、今ちやんさうのぼせないでもさ」と阿定も今頁よわり切る。

「知らないよ、知りませんよ。」

「だが今ちやんやッ。」

「どうせ浮氣ものですよ。」

「あれさ、さうぷんぷんしたッて可けないやね。何もあたしだッて惡氣で言ッたンぢやなしさ。」

「ようございますよ何でも。」口のうちで、「死、死んぢまはいッ。」

あはれや親はぎよッとした。

「阿今、阿今」

「可いよッ。」

「わかッたよ。わかッたよ。どうかと思ッて試して、見、た、よ、な、ものだ。」

「御ふざけでないよ、人ッ。可いよ、どうせあたしは昔の心が失せない浮……

……」

「でねエッて事よ。失せたよ、わかッたよ、試したのでわかッたよ、だから駄目を揑ねねエでなッ。また阿定も阿定だ、おもてむきに行り出す奴も無エもンだッ。」

飛んだ逃散にむッとして、

「あれさ、人の所爲にさ。あたしが何てッたッて御前がさうでないてや夫ッきりになるンぢやないか、馬鹿馬鹿しい。あるい事ッてへと何でも人ンとこへ持ッて來るンだ」。

「いや、さうぢやねエッて事よ」と順順にあやまり回る。「また御前がそんなに一圖になッてよ、何のこッた年甲斐もねエ。」

「どッちがッ。」

「まアよ、一口言ッたッてさう腹ア立つにや及ばねェ。何だッて已ッとこの一連は斯うむかッぱらが立ちてエンだらうなッ。」

「御前とおんなじ事だよ」と阿定も今は吹き出した。

「ンでいッ。」

「可いやね、もうごたごたは」と阿今が機嫌なほし出した。

「ほム、可いかな。」

ただおどおどするいちらしさ。一意ただ夢中で居る。

「まッたくね阿父さん、ね、伯母さんも聞いとくれよ、濡れ衣を着せられたのでね、ほんとに形迹も無い事なンでね」と更に阿今が繰りかへせば、

「ぞッつにねェ」と阿定前に懲り懲りしてさも力を籠めてぢッと云ふ。

「だけれども、爭つたッてやッぱり損だし、何御前さきの心がさう腐ってるのに、こッちばかりいくら心中立てをしたからッても始まらない事だし、何の人、あの人ばかりが男ぢやなしさねェ。」

「さうだともさ」と阿定粉烟草を烟管で掬ふ。

「つながッてるの、御あがりな」と阿今自分の烟草入れを差し出して、「家にや無い烟草よ。思ひ入れ取ッて來てやッた。」

更に話しを前につなげて、「それだからねェおとッさん。」

「おい。」

「びッくりも爲たらうが、平氣で御いでよ、仕方無い、是までの縁づくだわ。ね、さうぢやないか、ね、おとッさん、あれさ社にかまへて何を考へ込んでるの。」

涙に目ぬりさせて塞いた目をおもむろに見開いて、

「業が沸えてたまらねェもの。」

「さう云ッてたッて仕方が無い。」

「仕方は無からうが、つまらねェ。これ、阿今、あらためて聞くンだがな。」言ふ壁はふるへて居た。

「もう一度念押すンだがな。」

「あいよ。」

「きつと身に暗ェ事は無ェンだな。」利刀ふりかざしたほどに鋭い。

「わからないの、まだッ。」

「よし、志かと然うだなッ。ふム、それでこそ己の餓鬼だ。」

志ばらくぢつと考へ込んで、

「まだ籍にとそ入らねェにしろ、全で阿三どん出すやうな出し方だ。己、承知ができねェンだ。錢金にやこころばねェ。濡れ衣は何で干す。ふざけやがらッ。」

つッと起つて戸外口、二人は何の氣も注かない。が、程經ても戻ッて來ぬ。

「旦那どうしたえ」と店番の小女に聞けば、

「ただ今どちらへか入らッしやいました」と平氣で居る。

「あらまッ、をばさん」と驚忽な叫び聲。「だまッて何處か〳〵行ッたとさッ。着物も着かへず、まさか旦那ンとこぢやあるまい。」

「さうさねェ」と阿定も出て來て、店中ぎろぎろ見まはしてゐる。

「どッちへ行ッたかえ。」

「あちら〳〵」と小女は右の手を揮ッた。

「あらッ、ぢや旦那ンとこか知ら」と阿今興覺めがほに伯母と顔を見あはせた。

「さうかねェ、何だッて默つてことわり無しに、例の短氣がはじまッたのかねェ。」

「ちよッ、困ッちまふぢやないかねェ、人力車で行つたか知ら」と駈け出して門口から頸を出す。

「今見たッて見えるもンかね。」

「だけれどもつひ。ちよッ、困ッたねェ。上戸一人の酒ぢやあるまいし、一人でばッかり飲み込んでさ、行くなら行くと何とか相談するが可いぢやないか。あゝ氣が付かなかッたッけなァ」と案外阿今よわり切る。

「だけれども、かまはないぢやないか。いッそ。」阿定は落ち着く。

「ええ」と阿今の生返辭。

「さきが先方なンだもの、是非だまッちや居られまい、すりや何れ阿父さんが談判に行くのは御さだまりだね、さうぢやないか。くやしくッて堪らないから

行ッたンだろさ、可いやね、うッちやッて御置きな。」

「そりやまァさうだけれども。」

「行ッちや悪いのかえ。」

「わるいッてへ事も無いけれども――あんな短氣だからねェ」と不思議に當惑きはまる樣子。

第　一

二人の推察どほりで、太右衞門一目散に人力車で走らせて、旦那といふ湯島新花町の作波令三の家をおとづれた。

くやしくッてくやしくッて堪まらない。いつも内玄關から入るのが今日に限ッてえらい勢ひで表玄關からおとなふと、取り次ぎの下女もびッくりした。

「まゐりましたよ、旦那さま、奥さまの御どッさまが恐ろしい顔をして。」

「何ッ、おそろしい顔をして」と小づかひ帳をらべかけて居た令三ふりかへッた。

「どうも大變眞紅な、それこそ取ッて飲みさうな顔をしましてね、表玄關から。」

「表玄關からッ、へッ、ふざけやがら」とせせらわらッた。

「六畳へ通すさ。」

「かしこまりました。」

そのとほり通す。いつもは下女にまで丁寧に挨拶する太右衞門が今日に限ッて疾風土砂を捲く見脳。

「ちッ、碧碌鈴の兀洋燈。」下女一人で口小言。

待つ間程無く令三その座敷きへ出て見ると、何さま太右衞門すさまじい顔で居る。あたりまへの挨拶だけは濟む。

さばらく双方無言で居る。

「ええ、時におとッさん、來なすッた用むきも大抵分かッてるが、さぞ今日はだしぬけでびッくりさなすッたらうてさ。どうか是までの事と思ッてね。」

言ふ内に太右衞門涙一杯になッた。

身をふるはせて、「だン、旦那ア。いやはや飛んでもねェ事になりやした。と

うせ貴公ァはたらき者で御出でなさるから致し方は有りやせんけれど、またあたくしに取りましちやァあれも一人の娘でごぜェす」。思ふ存分は言ひ了れない。

「一人むすめだから何うだッてヘンだい。」うらめしげに睨みつけて、

「ようごぜェす、たんと御とぼけなせェ。もし旦那」とにじり出して、「あなたはなァ、あなたはなァ、どうせあんな奴めでごぜェす、否ンなッたら否でようごぜェさ、それで暇をくれたからッて可いちやごぜェせんかい。」

「たッて否ンなりや爲ないさ、さきから已に愛想づかしのやうな事を爲るから我慢に我慢できかねたのぢやないね。」

「うそ言ひなさるなッ」と睨みつけた。

令三もまたむッとした。

「何が詭言だい。言へといふなら此方に思ふさまの理窟が有る。言はないのが花、第一已だッても醜辱だと思ふンで、いさくさ無しに奇麗さッぱり出してやッたンだ、難くせもつけないで。」

「いンや、御待ちなせェ」と肩怒らした。

「難くせをつけなさらねェとえッ。もし、難癖を付けなさらねェとえッ。」

「さうともよ。」

「ちえッ、口てへものは重寶なもンでッ。旦那、そりや可け、可けやせん。難くせを付けねェもよく出來た、あれほどの難くせが有るもンか。」

「とりやをかしいね」と令三膝を立て直せば、

太右衛門又もにじり出て、火を噴くばかりのふるへ聲。

「あれほどの難くせが有りやすかい。尋常の事なら兎も角もさ、ね、素堅氣なものに役者買ひしたなんてへ難癖付けてさ、もし、ウンにや、まア御待ちなせェ、そりや旦那は働らきもンさ、女の一人や二人御こしれへなすッたッて男のはたらきだ、可うごぜさ。何もその女に煽られて罪もねェものに難くせつけて、形もねェ事を言ひがかりしなさるにも及びやすめェ。」

「おい、おい、おいッ。」

「何、何でごぜす。」

「何を言ッてるンだ、おい。」

「理窟言ッてるンでさ。」

「ちッ、馬鹿な、顏洗ッて來な。」

「顏……顏は今朝洗ひやしたッ。」

「ふざけなさんな。老人だと思つてやはらかく言ッてりや、なァんだ一人で好いやうな事を言ッてらァ。阿今にそのとほり聞いたのか。」

「さうでッさ。」

「不愍なもンだ。好い氣ンなッて、子の言ふ事ばかり一圖に本當として、要でもない耻を搔きに來たのかい。どうでも然う突ッ張るなら氣の毒だが手に足搦らせてやるからな。」

「へエ、手に足をッ。」

「さうよ。」

太右衞門すこしく面くらッた。

「うそだッてヘンですかい。」

「これを見な。」

投げ出した一かたまりの手紙と十五六枚の寫眞、取り上げて見てびッくりした。「阿今さま〳〵、市助より」、きたたるいばかりの艶書の山。のみならず寫眞も寫眞、にやけた男と阿今とが手を取り合ッてさへ寫して居た。

「ひえッ」と呆れたぎり。

「どうだ、文句が有るか、それで」とあざわらッて今三ちッと目を据ゑた。

さア穴へも入りたい。おのれやれ畜生阿魔、まじまじと白を切ッて、とうとう一人の親にまで熱湯を呑ませやがッた。

だからこそ念押した。それでも平氣で嘘で固めやがッて、ちッ、ちッ、どうしてくれやうかまア。

男泣きに泣き出した。

猶きばらくは今三ちッと相手を見つめて居た。

「どうだ、おとッさん」と云ふ聲は今更太右衞門の耳には霹靂その儘で。「さッ何とか言はないか。何よりの證據だ、口で言ふより痛いか痛くないか、やうやく思ひきみたらうが。樣ッ、搔かずともの耻を搔くンだ、べらぼうな。」

罵られても返す言葉は無い。咽び入って泣き入って、たちまち其所へつっぶした。

「旦、何ともはや、どうも唯、ちッ、畜生めでごぜす。さうとも知らず、全くの親馬鹿で、自己が餓鬼の言ふ事を眞個だと一圖に思ひ込みやして、ちえッ、面、面目がごぜェま……ちッ、死んでもッ」と切齒した。

「ちッかりと好くわかッたか。」

「分、分かりやしたよッ。分かッて見りやこの始末、旦那さま、かうでごぜッす、自己が好い見のやう、旦那さまが無理のやう、口巧者にこせへやしてッ、さうでもねェ、元があんな商賣してた奴だから、いくらか形も有る事かと思はなくもありやせんや、あン畜生の伯母ともども萬一さうかと聞きやすとね、あン畜生め白も白、白ばッくれた大白で、泣き出してまでさうぢやねェとッ、ちッ、あン時にだッ、だましやがッたッ。」ふるへる唇嚙み緊めた。

身をもがいて、「ちえッ、だまされたのかなッ。ど、どうしてくれよ、まッ。旦那さま、あン畜生も悪いンでごぜす、だまされた奴めも呆なのでッ。御めんなすッて下せェやし。」

「分かッたのならそれで可いさ。だけれどもよ、呆面で一躰來られた譯ぢやあるまいがな」と一分一分と刻み込む。

「そッ、ですとも。思へば思へば氣の毒な。何てッてあやまッて可いか。たッた一人の年とッた親をこんな所へ好い氣ンなッて越しやがッてッ、畜生、手に足にぎらせる、不、不孝者が又と二人と有るかやいッ。可哀さうだゝァ思はねェかやいッ。罰あたりの獄道めがッ」と吾と吾髮の毛をかきむしる。

令三さすがいぢらしく、

「可いやもう。そこでそんな大きな泣き聲出されちゃ迷惑だ。怒るなら怒るで、自宅へ歸ッて何うでもするが可い。よう、おい。御前の正直なのは分かッたから。」

一句に又もや胸を刺されて、聲呑みながら泣き伏した。

「爺めの正直なのが旦那に分……ちッ、ありがたうッ、死んでも忘れません よ、もし。愚痴ぢやござせんが旦那さま、一とほり聞いて御くんなせッ、私は

不斷から御恩を思ひに思ひやしてッ、不動さま〳〵定命の十年だけを獻げやして、そりや旦那と畜生めとの二人へ遣りてエもンだと、祈ッてたくれるでッ。」

令三是には泣かされた。横を向いて眼を拭ふ。見る太右衛門猶たまらぬ。

「もう言ッちやひやす何でも。こりや詭言でごせエせんよ旦那さまや。その親の心も子は知らず、旦那にまでも恥を掻かせて、ちッ、にッくい、にッくい、にッくい奴ッ。見やがれ畜生、どうするか。土性骨叩きつぶしても、ええ情ねエぢやねエか。」きゆッきゆッと込み上げて居る。

「誰だッて生命や惜しい。そりよ縮めても御恩けへしたく、又畜生めにも分けて遣りてエといふ老人の了簡すこしは些はッ。」

泣き聲するどく、

「今だッて子はにくくねエッ。口でこきおろしたッて、誰がぶちてエッ。」

令三ほろりとなる。

「見やがれ、旦那にもあの涙ァこぼさせて、はッあ、罰あたりの畜生め。好い目が出るもンけッ。と思ふと又自己が餓鬼、末の末が不憐でなッ。」

ひしげるほどに兩手をつかんで、

「おれが死んでよけりや死ぬッ。」

其心根を思ひやれば、もとより令三あはれで爲らない。泣くも尤も、狂ふも道理、モの子は憎いが、親は可愛い。

「さう泣かれると己だッて氣の毒にも爲るよ。まづい所に御前も來たもンだ。なッ、もう可いから泣くのだけは廢して御くれ、よッ第一見ッともない。」

きッと言葉をあらためた。「御前の心底はよく分かッた。わるくは聞かない、ありがたい。」

「ひえッ又ッ」と手を掉り、泣く。

「だから、よッ、よく御聞き。可いか、よく御聞き。子は憎む、親は憎まない。又泣くさ、よく御聞き。」

「聞いてやすッ」と座へつッぷす。

「あの女とは此後口も利かないが、御前とは交際ふよ。可いか、苦勞にするなッ。是までどほり烟草の荷も送ッてやる」と言ひかけて令三吾も吾知らず又ほ

ろりと爲る。

「御前の賣意買ッてやる、一生は食はせて遣る。ふりかへッても見るな、あんな女。」

太右衛門をいをいと泣く。

「いけないッてば、そんな大聲出して。泣かせるとて言ふッぢやない。」

「さうですとも」と切歯する。

「わかッたか、おい、分からないか。何わかつた。分かつたッなら夫で可い。見ッともない、もう泣くなさ。」

「泣くつもりぢやごぜせんやッ」とまやくりあげて、「何たるまア旦那さまか、もし、いッそ旦那さまッ。」

「うム。」

「そのありがてエ事を聞いて此儘。」

「うム、なるほど。」

「死、死にてエッ」と押み入る。

「つまらない事を言ふな。そのくらゐなら管やしない。馬鹿な事言ふもッぢやない。」

「は、は、はいッ。ちッ、何とまア、子は憎む、親は憎まない——子は憎む、親は憎まない——ええッ子は、親は、憎、憎、憎ッ」と段々に泣き落とす。

「無、無理ぢやごぜせん、子は憎む、親は憎まない——ただ慾にや、せめて親は憎まれても、子は憎まられたくねエのをッ。」

令三又も泣かされた。

「もッともだ、親の情あひ。已だッて是ほどの歎きを只で御前に掛けたくは些とも無いッ。改心するとか、あやまるとか、趣意が付いたらと思ッたに、あやまりも爲ないッだ、逐ッ出さずにや居られまい。」

「ふッてエ奴めでごぜッすよ。だが旦那あんまりそりや厚かましい、蟲の好過ぎる事だと腹も立ちなさるだろけれど、私が後生一生の願ひでごぜす、どうか聞いちや下せエやせんか知ら」とさも思ひ切つた躰で云ふ。

「ふム、どうするてッンだ。」

あらたまられると言ひにくい。

「勝手過ぎると嘸腹ァ立ちなさろッけれど、旦那さま。」

「だから何だつてンだ。」

「どうも言ひにくいンでねェ。」言つて、又さくさくと泣き出した。

「いやだぜ又。何だい、まァ。」

「勘忍してくだせェやし。實はその、旦那さま、今言はれた事が浸みやした。親は憎くねェ、そのかはり子は憎い、そりや無理ちやごぜェせんや。ごぜせんが、是でも、ちッ、親一人、子一人でごぜェやさッ。子が憎まられるてへのを親が好い氣で居られやすけッ。どうぞ旦那さまや、御たのみでごぜェさ、ね、阿魔め、もし心を入れ代へでも爲やしたならどうかね、何うかね、ちッ言ひにくゝつて顔から火が出らッ。」力一杯の聲。「どうか助けて御くンなせッ」と後は言ひ切れず泣き沈む。

やゝさばらく今三無言で居た。

「すると何かねェ、心を入れ代へたら今までどほり爲ろてへのか。」

「さッ、さやうで。もし、御たすけでごぜッすよ」と手を合はせる。

「ええ不愍なもンだなァ。ちがへば違ふ、嗚呼あれが子でこれが親。腹も、さァ立てねェて。」

今三きッとあらたまッた。

「折角だ、承知したッ。」

「えッ」と云つて顔をかめた。

「承、知えッ」とつづけたが、もう其他は言ひ得ない。

「御前の心が不愍でならない。にくいにや相違無いが、趣意が立つたら已も譏嫌を直さうわさ。」

太右衛門身骨挫げる感情。くッくッと堰き上げた。

「ちえッ、ひッ、畜生めッ。」

「何が、誰が畜生だッ。」

「ひッ、だれでもねェ、畜生めッ」。狂したかとさへ思はれる。

「ちッきしやうめ、浮かび上がッてけつかッたいッ。」擦れ減るばかり掌を揉ん

で、且拜む、且咽ぶ。「旦、旦、旦那さまッ、うひッ、この神さま。」
感謝の髓を凝らした一言、深く令三の胸をえぐッて、
「ええ、もう已も氣の毒だッて。」
「かまふもンか氣の毒だッて。」
「のぼせるなよッ。」
「をがまずに居られるけッ。」
「可いッてばさ、もうもう、おい。そんなら其氣で早く何うでもするさ。氣ちがひじみてたッて仕方ない。」
「は、はいッ」と又拜む。
「ありがてエと言ひてエが」、口を抓ッて、「言ひきれねエッ、ちえッ、身の内が沸えくりかへる。そんならば旦那さま。」
「おいよ。」
「老父は家へ歸ります。」
「あッ、さうだ、それが可い。歸ッて何とか本人によく言ッてね。」

「言ふどころかッ。」
「どうするッて。」
「どッ、どやしつけやッさ。土性骨なほさせて、それから御わびに上がります。」
令三いくらか笑みを含む。
「御前の子だ、どうにでも爲るさ。」
「そッならば歸ります。」
「あゝ、さうしな。」
額づいて起ち上がり、やをら襖に手を掛けて、又ひひッと咽び入る。

第三

夢路を馳るやうに太右衛門わが家へ駈け着けて、一目阿今の顏を見ると、むらむらと眼が眩むやうに爲ッた。
「やいッ阿今。」
その見脈が非常なので、まだ歸りかねて居た阿定もつッと傍へ差し寄ッた。

「おとッさん、御前何處へ行ッたの」と澄まして言はれて、

猶急き上げて、「よッくも左樣澄、澄まし了ッてやがるッ。これ、やい、阿今、其口でさッき何てッた。」

「何がさ。」

「何がさも無ェもンだ。これ、旦那ンとこから何うして出されて來たと吐しけッ。まざまざとした嘘言を吐きやがッて、此親をな、この年よりをな、己はな、手に足にぎらせやがッたな。」

「旦那ンとこへ行ッたの」と阿定が横から質問した。

「行ッたンだ。」

「そゥら。」

「何がそゥらだ。阿定、これ聞いてくれ。乃公御前に向かッても面目ねェ。どうだい、こンの畜生のさッき吐かした事はみンな反對の謊言なンだ。」

「謊言ッ」と阿定目を呼ッて、吾知らず阿今を尻目に掛けた。

「うそッ、あべこべのえッ。」

「だからよゥ、なさけねェちやねェかよゥ。馬鹿正直に此奴の言ふ事を本當にして、一談判つけて遊らうと、行ッたンだ。すると、どうだ、逆ねぢだわなッ。」

くやしなみだはらはらと、「人に熱湯呑ませがッた。市助ッてへ白粉くせェ馬の足と」。

「そりや違ふ、馬の足ぢやないよ」と阿今俄に槍を入れる。

「馬の足で無くッて何だッ。」

「座頭だよ。」

平氣で惚けられて、太右衞門ふるへ出した。

「こンの畜生めッ」と毆たうとする、阿定あわてて遮し止めた。

「まアまア亂暴な事は。そりや腹の立つのも無理は無い。今の此矢さきで、座頭だよも無いもンだ。そりや今ちやん、御前がわるい。それにしろ何にしろ、騒いだからッて分かりやしない、徐かに落ち着いて咄さないちや、ね、さうだろ、小口だけ聞いただけぢやさッぱり何うも、ね、ね、落ち着いて。」

取り做されて辛くも癇の蟲を押さへたが、涙すこしも止まらない。

睨みつけて、「畜生阿魔、やぶれかぶれで落ち着きやがる。どうしたらまァとんな餓鬼をッ、ええ阿定察してくれ。」

「あいよ、あいよ、年よりに泣かせてまァ。それで、どういふ咄しなの。」

「まッ舌も引ッ釣らァ。旦那ンとこへ行ッてな、なぜ人の娘に難癖付けて出したと遣りかかると、どうだお前、藪蛇だらうぢやねェか。」

「藪蛇とは。」

「藪蛇？　藪蛇は藪蛇、どうてへ事もねェ、藪の蛇だ。」

ぷすッと阿今吹き出す。太右衛門又も睨みつける。阿定ただ苦り切る。

「あわてないで落ち着いて御言ひよ。」

「あわてる氣ぢやねェンだけれど」と云ふ口氣からして定まらない。

「己だッてへどもども爲やうぢやねェか」と眼を拭ッて、「その藪へびてへのは斯うなンだ。何とまァ全く此奴が市助てへ馬の足とふざけやがッた置様てへのを手紙やら寫眞やらで見せられたンだ。」

「あら、まッ、呆れた。」

「ほんとにまッ。威張ッて突ッかかッたのが何うでェ、まるッきりの腰折れだろぢやねェか。」

「一句も無くなッちまふわね。」

「それこそ穴へでも入りてェやさ。此奴が始めッからあんな口幅ッてェ事を云はずによ、本當の事を吐しやがりや何もあんな恥辱を掻くにも及ばねェぢやねェさ。おなじ行くにしても最初からあやまるなり何なり、其行き方てへものが違はァな。そりよまァ何うだ、阿定、あれほどに念押しても空ッとぼけて居やがッてよ、ぐうぐうしいとも太エとも、とも何とも本當に言ひ様のねェ畜生ださ。」

阿定今更最前加へた自分の注意が的中しただけ猶氣の毒で、聞く事ごとに只呆れて、それにしても化けがあらはれて、阿今はどんな躰で居るかと絶えず其方をちらちら見れば、案外に平氣である。

灰の中へ火箸で何やら字を書いて、身をば横くづしにして火鉢に凭れ、何處を風と澄まして居る。

「やい阿今ッ」と太右衛門今はたまりかねた。「どうしたら手前はさうづうづうしくッ、これ、今の事を何と聞いた、だまッてばかり居やがッて。」

「何と言ひやうも無いぢやないか」と猶落ち着く。

「何と言ひやうもねェとえ。ふざけるないッ、親不孝。化けの皮、何と言ひ譯が有るかやい。」

「知れたら知れたで仕方が無いさ。どうせ人間一生の内にはいろんな事が有らァね。何もさうぷん〳〵怒らないだッて可いぢやないか、氣の小さい。」

阿定呆れてだまッて居る。

「氣が小せェ？　一生の内にはいろんな事が有る？　ふッてェ事をッ」と太右衛門應接に暇無くといふありさまで。

「又さうぢやないか、苦勞にして噪いたからッて始まりやしない。あの人ばかりが男ぢや無し、こッちも馬鹿を爲たのは歹いンだけれど、いつまでそれを氣に病んでたッて何の益にも立ちやしないわね。それよりか先の事を考へるのが當世だわ。又何だね、頑みンなる人を見付けてさ、御前にだッて旨い酒を飲ませて上げらァね。くよくよなンで御爲でないよ。」

太右衛門ほとんど呆れ果てた。呆氣に取られたといふ躰で、暫らくは穴の明くほど阿今の顏を見つめて居た。それこそ力も抜けるばかり。

「どうも早」といふと同時にはらはらと又涙に爲る。

「手前は良い氣だてだなァ。呆れけへッて物が言はれねェ。どうだいまァ阿定、こんな人間が有らうかまッ。」

「どうもねェ」と阿定までが挨拶に當惑する。

「乃公もう精も根も盡きちやッた。親でねェ、子でねェだ。これやい阿今ッ。」

「どならずとも可いぢやないかェ。」

「ンでいッ、畜生。どならずに居られるけッ。」眼するどく睨み付けて、「やい、手前はなァ、手前はなァ、どうしたらそんな了簡に、ちえッ、どうしたらさう不孝にッ。」

「いやだよ、まァ。何も不孝にさやしないぢやないか。困らせずに好きな酒でも飲ませて置きゃ……」

「利いた風言ふないッ。」

「おや又なぜえ。」

「ふざけるないッ。」

「をかしいね、なぜさ。」

「とぼけるないッ。」

「ふッ、否だよ、おとッさん。」

「うム、いやだらうわさ。邪魔だらうわさ。道理でをかしく衝りやがる。不孝にあねエも無エもンだ。是ほどの不孝が有るけッ。なぜ親に手に足にぎらせるまでの耻辱を掻かせたよッ。」

「そりや御前があんまりそそッかしいからだァね。」

「何だッと。」

「又さうぢやないか。行くなら行くでさ、一應相談してからだッて可いぢやないか。御前がよもや突然に行きやしまいと思ッたから、あんな風にも言ッたンだね。行くと思や又ぎりぎり決着の所を言ッたのにさ。あたしが何も御前に耻

辱をかかせたいもンかね。言はば御前がそそッかしくッて、一人で酔興に耻辱を掻きに行ッたンぢやないか。あたしの所爲にするのは失やひどいわ。」

太右衛門すこしく烟に捲かれた。

「ンでいッ烏龜王八ッ。」

やッと攻撃の種思ひ付いた。

「だッて何も詭言で固めなくッても可いや。親身同士の所へ來て詭言てへのは何ういふ譯だ。」

「心配するといけないからさ。」

「ンでいッ畜生。」太右衛門唯のぼせ切る。

「だがね今ちやん」と阿定が終に見るに見かねた。「そりや御前の方にも理窟は有るだらうけれども、ね、このとほり律義一遍正直一途の御とッさんだろ、とのとほり逆上せて居るのが可哀さうぢやないか。」

「何早く死ねてへンだ」と太右衛門横あひから愚痴る。

「まッ、御よしよ御前も愚痴は。ねエ今ちやん、さうぢやないかい。可愛さう

でもあり、又逆上かすのもあンまり譽めた事ぢやあるまい、えッ。」

「そりやさうだともさ。」

「化けるないッ」と又太右衛門。

「まアだまッといでッてばねエ。だからね今ちやん、何ぼ一服一生の間がらだッて、ちッとは優しくね、氣の休まるやう、つッかゝらないやうにね、それが御前やッぱり功德といふもンだよ。」

「そりや妾も思はなくは無いのよ」と案外調子が大人しい。「だけれどもさ、あんまりだわ、がみがみ扱きおろして……」

「そッ、そりや爲方が無いぢやないか、正直一遍の氣性なんだもの。心易だてが過ぎたにもしろ、あんまり御前の方から突慳貪に言ふのも見好い事ぢやないからね。」

更に調子をあらためた。

「もう濟んだ事を言ひ出して噪いだからッてつまらないから是からの相談するとしてねエ、今ちやん御前さアどうする了簡なの、それをまづ聞きたいね。」

太右衛門も耳引ッ立てる。

「どうするとは。」

「だからさ、此儘旦那の方へ楯を突いて、ふりかへッても見ない氣か、それとも謝るものならあやまッて是までどほりに爲らうとの氣か、その二つ一つをさ。」

「さア、そりや何うもねエ。」

太右衛門だまッて居られない。

「阿定、さッき言ひ脫したが、斯うなンだ。旦那はなア、不埒をした子は憎いが、何も知らねエ正直者の親は憎くねエから、よしんば阿今との手は切ッたにしろ、是までどほり己には荷をも送ッてくれると、何とまア何うだい。」

「それほど分かる人なンだもの」と阿定思はず眼をうるませる。

「さばけた人ぢやねエかよッ。猶氣の毒でたまらねエや。だから己も散散あやまり閉口したンだ。此奴の前で言ふのも業はらだが、全くは斯う言ッたさ。にくゝッても親子の情合、見す見すわが子が憎まられ、自分一人が憎まられねエてへのを、親は好い氣でも居られねエと、さうぢやねエか。」

阿定今はさめざめと泣く。

「どうだい、今ちやん、親てへものは是ほどだよ。」

「分かッたかえ、分からないかえ」とすこし焦燥こめば、

屋するどく楔子打ち込めば、阿今だまッてさしうつむく。

曖昧に「あいよ」といふ。

「けだものと口を利くな」と太右衛門更に乘り出して、「で、旦那にやあやまッた。是から歸りやして、土性骨を叩き直し、御わびをするやうに致しやすから、どうか今度だけの所は勘辨して下せエやしと頼んだンだ。」

「大きにね、それから。」

「すると漸う承知してくれたろちやねエか。」

「勘辨するッてかえ。」

「だから承知じたてへば。」

「あやまッたら歸すとね。」

「だからよウ。」言ッて阿今を尻目に掛けた。

「どうだい、今ちやん、すッかり聞いたらうね。」

だまッてうなづく。

「何と思ふね、まア御前。」旦那の大量を稱揚するよりはむしろ訓戒の方にのみ氣を奪られて、一途その方にのみ傾く。

猶阿今だまッて居る。

太右衛門ほとんど呼吸も吐けぬ。

「えッ、今ちやん、なぜ默ッてさ、何とか御前腹の中を。ねッ、えッ、今ちやんや。」

まだ阿今だまり切る。

太右衛門くわッと急き込んだ。

「うぬッ、たんと默ッてやがれッ。」眼を怒らして睨みつけて、右の拳をにぎりかためた、いざと云はばとの見脈。

中で阿定ひとりで困る。

「よウ、どうしたのねエ、今ちやん。困ッちまふちやないか、それちや私まで。」

鳴かぬ烏鴉が只一聲「言へばすぐ怒らァね。」

「えッ。」

「言へばすぐに怒るもの。」

「ちや歸るのが否だッてへのッ」と阿定は氣息逼迫した。

「ふつふつ妾いやだもの」と斷手として言ひ放つ。

一同胸がひやりとした。

最前のいきほひ何所へやら、太右衞門此一言を聞くと均しく、たちまちに咽び入ッて志まッた。

言外の言、情外の情、その心中を察しやッては阿定とて身も世もあられない。

「伯母さん、あたしが我儘だとばかり思ッて御くれでないよ。そりや落籍されて世話になッたのは有りがたいさ、けれど否なものは否だからね、是ばッかりは。」

「いやな者になぜ引かされたゝだいッ」と太右衞門泣き聲ふりたぼッた。

「那な面な、金をつかはせてよ。いやな者なら否でとほして、金つかはせたり、泥塗ッたりするにや及ぶめェちやねェか。」

せゝら笑ッて、「野暮な事言ッてるよ。」

「何で野暮だいッ。」

「野暮さ又。」

「又いがみあひだ、困るねェ」と阿定一人で呟いた。

「野暮だァね。だまされるのは御客の馬鹿、だますのは賣人のあたりまへ、否にしろ何にしろ、おだて込んで足でも洗ッて貰ふのが彼の商賣での腕てへもンだわ。未練ばかり出して居て何で氣の利いた事が出來るもンかね。はやく云や踏み殺にされるのが馬鹿、そりや何うも仕方が無いわ。」

呆れて二人ただ默る。

「何もあたしがおとッさんに不孝する氣ぢや無いンだわ。どの人の世話になッたからッて、それはおとッさんの方で關ふ譯ぢや無い、あたしや唯自分の氣に入ッた人を相手にして、どうか斯うか阿父さんをも安樂にさせて行かうと思ふだけさ、何も咽喉口を乾させるてへのぢやなし。ね、をばさんさうぢやないか。」

「そりやそんなもンだけれど」と生返辭して太右衞門の方を見る。

太右衞門苦り、苦り切ッて、

「ああ、あんな商賣させたのが己の不覺だッ」と溜め息太くほッと吐いて、「身で身を賣めるよりほか仕方がねェ。」涙はらはらと膝の上。

一座しばらく沈とした。

「むかし氣質ばかり言ッてたッて、おとッさん仕方が無いぢやないか。」

「何とでもねかしやがれッ。」

「あッ、あれだものを、伯母さん。二言目には悪對だ。ンねッ、人ッ。」

「世の中にやな、これ、義理と冥利てへものが有るぞ。」

「有らァね。」

「知るめェ、手前。」

「知ッてるとも。」

「うそ吐けッ」と又睨めつける。

「それも所と場あひだわ。凡夫さかんに神祟り無しとさへ言ふぢやないか。」

「あべこべに異見しやがらァ。」

「異見なもンかね、ただ喧しさ。まァね、是までの事は是までとして、一圖に野暮ばかり言はないでね。」

「どうせ野暮だいッ。」

「あれさ、まァ。御前をわるいやうには爲ないから、好きな酒ぐらゐ飲ませてもあげるから。」

「否でいッ、そんな酒ッ。」

阿今美事に跳ね飛ばされて大きに志よげた。

「いやなら廢すが可い」と口の中で呟いたつもりだが、聞こえた。

「いやなら廢せと吐したな。」

「可いやねまァ」と阿定が中を入れかかると、

かぶりを掉ッて、「可かァねェ。見えた。肚ン中まですッかり見えた。腐ッた酒は、飯も、何も此口へ入れたくねェぞよ。」ぬッと口を突き出した。

「馬鹿だ、嗚呼、聽親は馬鹿だ。馬鹿だ、馬鹿だ、大馬鹿だッ。」全身をふるはせ

て、

「さうでもねェ、冥利と言ふ事が有る、利益を思へばこそ、末の末までを思へばこそ、色色にも言ふ。ちッそれがみんな無駄だッ。あッ、子てへものは持ちたくねェ。」咽喉一杯の力を籠めて、「子てへものはにッくいもノだッ。」

聲をぼッて泣き出す。阿定も何と取り做しの法が付かない。もらひ泣きに亦ただ泣く。

「やいッ阿今、手前に物を言ふのも是ッきりだぞ、もう親でねェ子でねェぞ。」

「何もそんなに怒ら……」

「ふざけるないッ。これ、よッく言ッておくぞ、可いか父子の生きわかれにッ」と言ッただけで胸迫ッた。

「勝手に世をわたれ。一人の親をふりけへるな。手前の冥利を思ッた是までの意見だ、もうもう何も言はねェぞ。さッ、出て行、すぐ出て行。」

「そりやまァあんまり」と阿定が。「さう怒ッたからッて……」

半ば言はせず、「うンにや待られねェ。旦那に對して乃公が濟まねェ。」

「そりやさうだけれどもさ。」

「いッけねェでッば」と語氣正に烈火をあざむく。「我慢のできるところまでは我慢もするわ。堪忍袋の緒が切れた。誰が何てッたッてもう明かねェ。」

涙さながら浴びるが如く、

「阿定、己ばかりを頑固だと思ふなよ。誰だッて己が御兒は可愛いや。だけれども世間の義理も義理だ。あッきらめるばッかりだ。旦那と別かれた時の口上に對し、どうして御前人間の皮アかぶッて此儘で居られるけェ。あきらめた、すッぱりとあきらめた、やい阿今、さッさと出て行かねェかいッ。」

阿定猶可いわとは言ッて居られない。

「御前の身ンなりやそれも至當だけれども、これ代用の無い父子ぢやないか。何もそんなに一概に……」

「いッけねェよッ」と叱りつけた。「わからねェぢやねェか御前まで。」

「だけれども、まァさ。」

「いッけねェよッ」と言ひ放つ。

阿定手も付けられなくなッた。

「やい阿今、手前の一人の親は世の中の義理のために、一人の子をば捨てるッぞ。それだけをよッく覺えて置け。」

今更阿今も當惑したが、意地であやまる事も爲らない。阿定が一人で氣を揉んでも、肝心の本人からあやまり口上が出ないので、偖如何とも爲しかねた。

「どうだね、阿今ちやん。」

「どうも仕方が無いのねエ」と素氣なく云ふ。

「かまふな阿定畜生に」と太右衛門一人で哮り立つ。

「困ッた事に爲ッちまッたねエ、今が今がたまで御酒飲んで、あんなに讒嫌の好かッたものをさア」と愚痴ッぽく一人言のやうに云ッて、やがて又きッと思案した。

「そンなら今ちやん、云ふなり次第出て行くつもりなのかえ。」

「どうもおとッさんが怒り切ッてるンだもの。」

「何處へ行くつもりなの。」

「馬の足のとこへ行きやがれッ」と太右衛門が。

之を阿定は耳にも入れぬ躰で、

「ねエ、どこへ。」

「別に何處ッて心あたりも有りやしないわ。こんな事に爲らうとも思はないンだものを」と幾分か志をとした樣子。

「兎も角も、そんなら自宅へ御出でないか。おとッさんだッて今かう火のやうに爲ッてる所だから——御前もまたとッくり落ち付いて考へて見るさ、ねエ、氣を抜きや又御たがひに勘辨も付いて來るものだからねエ。さう御爲よ。」

「ありがたう」と阿今うなづいた。

阿定一人が骨の折れた役で、中へ立ッて双方の間を取る、兎も角もと云ふので、阿今をあづかッて、一先わが家へ立ち戻ッた。

一人殘ッた太右衛門の胸のむしやくしや。

第四

菊本と街燈出した小意氣な造作、誰の目にも待合と見える一かまへの中二階に、女中を相手に火鉢に向かッて居る一人の美人、即ち例の阿今であッた。

女中といふのは卅四五、海山の功を積んだらしい相好で、目つきすこぶる凄ましい。

逐一に阿今は今日の始末を咄したらしく、

「だッてあんまり忌々しくなッちまッたンだもの。あんまり頑固にも程てへものが有りまさァねェ。」

「で、逐ン出すと仰やるの。」

「だから逐ン出たんだわ。いくら云ッたッて分からないンだもの。好い畜生さ、伯母さんとこへ引き取られてね。」

「ほゝッ隨分御器量が。」

「ほんとねェ。腕がむかついて來て仕方が無いので、御湯へ行くてッて、こッ

ちへ飛んで來ましたの。」

「入らしッて何うなさるの」と女中すこしく笑みて合めば、

晩む眞似して、「姉さんも根性がわるいのねッ。」

「根性の好い人はちがひますわね。」

「はばかりさま、市助と申します不調法ものでございまして、へいッ。」

「御馳走さま。手ばなしで澤山にどうも有りがたうございます。あのゥ、」わざと言葉に力を入れて、「旦那さまは大層御遲うございますことねェ。」

志かつめらしく改まッた。「どうもそのねェ、つひ門が多いンでございまして ねェ。」

「おやおやまァ。」

「あのとほり好男子過きますのでね。」

「戯ちますよ。」

他愛無くふざけて居る所へ、襖の外で男の聲、「姉さん此方？」言ふまでもなく市助で。

「あッ御はいッなさい、親方、ちやァなかッた旦那さま。ねェ旦那、御おこんなさいましよ、何、何ッて眞面目で聞くから可愛らしい事ねェ。」

「だッてちッとも分かりやしませんや」と市助烟に捲かれて居る。

「わからない筈ですとも。」

「なぜ。」

「奥さまからして夢中ですもの」と言ッて女中くすくすッと笑ひ轉けた。

市助いよいよ分からない。分からないで、只にやりにやり、まじりまじり。

それがをかしいとて女中猶笑ふ。交際といふ格で、さすがの阿今も亦笑ふ。

「何かでも付いてるッですか、私の顔に」といよいよ本氣に眞面目になられて、

「付いてますともさ」と此女中中中食へない。

「何が、えッ、何が。もし何がです、奥さん」といよいよ又生眞面目に爲る。

「何でもないッですよ。阿良久さん（女中の名）がね。あんまり親方に惚れてるもッでね、ややともすると、紅の痕でも付いてやしないかと、氣の所爲でさわぐのよ。」

「おやどうも恐れ入りましたねェ。」

「へェ何が。」

「御自分の御ところもちを仰やッて下すッてね」と口早に言ひなぐッて、「居れば居るほど聞かされて、どれ參りましよ。」言ひ捨てて出て行ッた。

杯を市助に差して阿今はッと大息一つ。

「ねェ親方、暴露たのよとうとう、○に」と親指を出す。

「えッ、暴露、いつ、まァそりや。」

あわて込めば、落ち着いて、「どうせいつか一度は知れるに決まッてるッだわ。その氣だからびッくらしないッだけれど、それから遂ッ出て、家へ歸ると、むかし氣質の樣子が大あとりなの。」

是から委細の咄をした。

「ねェ、あたしだッて最うあやまッてあんな且つくッ處へ歸るのは不好だァね。何人ッ、男の無い世界ぢやなし、どうにだッてなりまさね。だからその腹癒せに飛び出して遣つて來たの。」

市助妙に苦り切る。どうしたか此處に至っても有無一言の返辭も無い。

「ねェ親方、さうぢやありませんか知ら」と更に返辭を促がすと、

目を瞑ッたまま下を向いて、「あゝ私がわるうございました。」

阿今すこしく意外に呆れた。

「妙ね、まァ。何ですッて。」

「いえ私がわるいので。どうも三方四方の人さまへ御迷惑を掛けましたよ。」

沈む調子にますます呆れた。

「どうもどうも妙な事ね」とまばらく男の顏を見つめて、「親方、そりや本氣で云ふの。」

「本氣ですともさ」と屹と言ふ。

「まァおどろいた」と全く驚いた。

「親方がわるいとは夫や變ぢやありませんかねェ。何も親方の方から賣り付けたてへ譯でも無し、全くあたしの方から道樂な眞似をはじめたのを……」

言葉なかばで首を掉ッて、「いえ、それにましてもね」と暗氣思の外に鋭い。

「それにしろ何にしろ、嗚呼今の御はなしでつくづく胸に淺みましたよ。」

「まァ何がッ。」

「親御さんの御氣の毒さ。」

「おやおや、まァ」と又呆れた。

市助眼をさへ屢瞬く。

「あたくしにも御母が一人有りますので、今の御はなしを伺ふと、人事とは思はれませんでねェ。そりや貴女は男まさりの御氣象ですから、親の言ふ事なンそと一息に遣ッつけて御ましひに爲りましやうが、さッ其所が思案の爲どころです。」

「どうも驚いた事ねェ、親方に異見されに來たやうだ。」

「いえ、ま、御氣にさはるか知れませんがよく御聞き下さいよ。正直一遍の親御さんの御心に爲ッて御覽なさい、そりや御立腹なさるも御無理ぢやございませんからね。こんな家業こそ爲て居ますが、一人の親の事は私のやうなもので も忘れませんでね、そりや馬鹿正直からでもありましやうけれども、まァ一人

の親には苦労掛けたくないと始終その事だけは心に注めて居りますのでね、そんならなぜ貴女がたと巫山戯た真似なンぞ爲たのぬとの御言葉でもありましやうけれど、それが心の迷ひでした。」重ねて又歎息した。

「どうも大變な事を言ひ出したのねェ親方、あたしだッて親に苦労を掛けたいと思やしないわ。何も親に食へなくなるやうに爲やうてへンぢやなしさ。」

「いいえ、食へる食へないは又別です。よしんば食べて行かれるにしろ、どんな贅澤が出來たにしろ、物は何でも趣意一つですからね。その趣意が面白くなかッた日にや咽喉に刺が立ちますて。」

阿今ただ默し切る。

「一時の心の迷ひからつひ私も今までどうか手固いで通して居たのが、貴女さまと飛ンでもない事に爲りましたが、その先非はすッかり今後悔いたしました。どうして貴女、親御さん、そんな御年よりの御心もちを御察し申して、好い氣ンなッて居られましやう。あわるうございました」と眼を拭ふ。

「それぢや親方、あたしに何うしろてへの」と阿今もすこし涙含む。

市助は無言で居る。

「親にも旦那にも捨てられるやうに爲ッた妾に今更どうしろてへの。見下げはてた奴だから最う鼻も引ッかけないてへの。」

「何の、そんな事てすか。ですから親御さんの御心も御察し申してと云ふンです。」

「だからさ、どうしろてへの。」

「言ッたらそのとほりに爲さいますか」と言ふ聲は無量の重量を帶びて居る。

「そのとほりに？」とさすが答辭に躊躇した。

「さよでございます」と睨むばかりに見つめれば、

ややしばらく考へて、「聞かない内は分からないわ。」

「それぢや仕方有りません。」

「それぢや又困ッちまふぢやないか、可いわ、言ッて頂戴よッ。」

「ですからそのとほり爲さいますか。」

又しばらくは考へたが、聞かぬ内は氣に爲るので、

「聞く。そのとほりにきッと爲る。」

「そりやきッとですか、まちがひなく。」

「きッとッ」と力を入れた。

「貴女さまの事ですから御言葉に間ちがひもありますまい。からして、それぢや申します。」

一段とあらたまッた。聞かぬ内からびくりとする。

「聞いて下さいませんと困りますよ」と又念押した。

「くッどいわね。」

「ぢや言ひます。さッ、どうか。是までの事は水に流して、親御さんの御心の安まるやう思ひなほして下さいまし。」

凜然と言ひ放たれて、さすがの阿今もぎよッとした。無言でうつむく事やや少焉、見る間涙の雨となる。市助べめ木にかゝる思ひ。

やがてぢろりと見上げる阿今の眼にどれほどの怨恨の色が籠もるか、正面からは見て居られぬ。

「ようございますよ、分かりましたよ」と否にあらたまッて只一言。

市助もただ默す。ぞッとするほど沈閑として了ッた。

「そんな御返事を聞かうと云ッて、御念押したのぢやありませんがねェ。」怨みがましく言ひ出した。

「ですから分かりましたッてばッ。」癇氣非常といふ樣から、あらあらしく雨眼拭ッて、手巾の端を前齒でくはへて、きゆッきゆッと手で引ッぱッて居る。

「ですから私念押したン……」

「分かりましたッてば」と跳ねつけた。

うつむいた儘、「よッく分かりましたとも。どうせ旦那に捨てられるやうな醉興な阿房ですもの、これから關係ッてると、親方の御迷惑になりますからねェ。わかりましたよ。」

「あれッ、それぢや困るンです。どうもさう捨くッちや……」

「どうせ捨鍬なンですもの。」

「そりやあかし貴女にも似合ひませんね、念押した時に何とおッしやいました

えッ。今ンなッて否味で怨みがましく言ふとは些どうもね。」

「馬鹿ですからね。」

「あれさ、どうもね。困りますね、それぢや本當に、何もあたしが悪意で云ッたンでもなし、もともと貴女を馬鹿にするのでも何でも無く、まッたく一人の親御さんに飛んでもない御苦勞掛けるのが御いたはしくッて御いたはしくッて。それには又貴女だッて行く先の長い方で入らッしやる、眞面目で旦那ンとこに御出でになれば、何不自由も無くて行かれるのでしよ。どういふ思しめしか知りませんが、あたしどものやうな、こんな吹けば飛ぶよな者の所へ入らしッたッて、物の半年も御辛抱のできるもンぢやありませんからね。自分の恥を言ふやうですが、本當に外部ばかり好い、死にくるしみですからね。」

「手鍋提げてもッてへ唄が有りましやう」と下を向いたままで言ふ。

市助しばらくぴたりと默る。どうしたのかと見上げると、涙一杯湛めて居た。

「あッあ、あがりたうございます、本當にその御一言、どうしたッて忘れませッ、さッ、もし、あなた、こんな奴をそれほどに思ッてくださいますか、眞實に。」力を籠めれば、ぞッとした。

「だッから腹も立つんだわッ。」言ふか了らず、びりびりッと手巾引ッ裂いた。

市助水をうたれる感情、涙の儘で見つめて居る——止せとも云へず。

双方氣息も吐けぬ刹那。洋燈澄まして、ぢィぢィと油を吸ひ揚げる音。

「人の氣も知らないで、ほんどうに男子ッてへものは。あッあ、こッちが痴いから、ええもッ、ほんとに何ッしたら」と又裂きあまりを引ッ裂いた。

裂きあまりゆゑ前より譯無く裂けて、ちかもぴゆうッと好い音がした。ただならば噴き出すところ、どうして今はそれ所か。

「ですが、眞實それほどに」と問ふでも無く、問はぬでもなく、「まつたく嬉し、ありがたうございます。さッ、それほどに思ッて下さるなら——いやさ、困らせては下さいますまい、いえ、いぢめては下さいますまい。ねッ。」

顔のぞき込めばちくちく泣く。

此處が丈夫の我慢の爲ごと辛くも心を鬼にした。

「でしよ、えッ。さうまでに思ッてくださる、それだけの事をどうそもし、御

無理でもありましよが、どうぞ私に爲てください。ねッ、これだけは何うぞ是非。」

妙な方からぐり込まれて、阿今返事に當惑した。今さら無茶に否とも云へぬ。と云ッて、おいそれと云ふのも亦。

「どうぞこんな奴にでも切めていくらか好い心もちを爲せて下さい、ね。是まで一方ならない御厚負にあづかッて、今さら是ぎりになる事かと思ふと、身を斬られるやうですけれども、さッ、其處、其處なんで。世、世の中の義理ですッ」と聲までもうるんで來た。

「親爺さんにもよろこばせ、また旦那にも安心させ、その中にもあなたさまの一生が間ちがひ無くなると云ふ、その方の樂しみと、今の今思ひ切らずにして了ふたのしみと、双方を目方に掛けて、さァどうでしよ。どうぞ、もし、御ねがひ、御たのみ、御慈悲、御なさけ、あたしにその好い思ひをどうぞ爲せてやッてくださいまし、えッ。いけませんか、えッ、もし、どうぞ。そのかはり是までの」意氣にはかに凄まじく、「御厚負は忘れません。又相應はらず公然と御

出入だけは爲せていただくやう、さッ、このとほりでございます。」涙を流れるままにして一坐すべッて平伏した。

阿今骨身も粉碎する。ありありと目前に親父までが出て來たやうで、脈までがをどッての胴ぶるひ。有無は無くてせぐり上げる、見て市助五躰も竦む。

又あらためて差し寄ッた。

「ね、もし、どうぞ、ねッあなた。決してわるい事は申しません。また決して水くさい了簡かたで云ふのでも決して決して、それだけはどうぞわるく思しめさずねッ。御はなしで聞いただけでも、一轍だけに御氣の小さい親御さん、もしか又さうでもない、あなたさまの事を苦に御病みで、それこそ旦那へ對して濟まないとか何とかいふので、もしもの事でも有ッた日にや、でないにしろ、御わづらひにでも爲ッた日にや、そりや貴女罪ざめが好くはありませんよ。」

胸に浸みたか、何今涙の量が增す。

「あたしだッて、皆さまへ御目にかかッて、男らしくきりりとあやまります。そりやもう却つて貴女さまの御迷惑になりませんやう、旦那ンとこへ御かへり

に爲つても肩身の狹くないやう……」

阿今ひイッと泣き伏した。

「さッ、どうぞ、御ねがひでございます。あたしも御ためを思ふ、どうぞ貴女さまもあたしの……もし、どうぞ、ねッ貴女。」

至情は鐵を綿に變へた。今さら聞かぬと云ふのも耻かしく、美事に阿今決意した。

「親方濟みませんでしたッ」と、今やその涙實意の、實意の精である。

「あッあ、分かりましたよ、ほんとに。ちッ、夢が覺めッ、わるく思ふもンですか、もッ、言ふとほりに爲ますよッ。」

市助は猶たまらない。肚では攫み付きたいほど。

「ひよッ、ありがたうございッ、ちえッ、濟み、濟みませんわよッ」と是も浴びるばかりの涙。

「不斷負けずぎらひの勝ち氣でばかり押ッとはして居たもンで、つひつひ怖い者なしになッちまッたンですよ。もうもう夢が覺めました。親方の旦蔭です。

わすれませんよ。」

悟る時にはさすが斷乎としたものだと市助つらつら感じ入つて、旦は惜しいやうな心もする。

さうでないとまた吾とわが心を制して、

「こんな奴の言ふことをよく聞いてくださいました。あたしも夫は忘れません。それぢや御急き立て申しますやうでございますがね、もう夜も大方」時計を出して一寸眺めて、「これもう九時です。なまじッか又今夜此所へ泊りなぞ爲ますと、かへッて利益になりませんから、で又さほど更けたてへのでもなし、此儘御かへりに爲りました方がね。」

阿今ただうなづいた。

「あたしも御一所に御供しますから。」

「親方、それだけは何うもねエ。何あたし一人でようございますよ、大丈夫。」

「御迷惑になりますか。」

「いいえ、さうぢやありませんけれども、かへつて夫ぢや親方に御迷惑ですも

の。あたしの勝手でこんな事になッたので、何も親方が口をつぼめて、いやな思ひしてあやまるにも當たりやしませんわ。それぢやあんまり御氣の毒ですものの。どうか、ですからそれだけはね。」

「何そりや管やしませんや。又一つには此所であたしが御一所にあやまりに參れば、かへッて皆さんも御安心の爲ることッてすし、二つには夫からまた公然と御出入りも叶ふやうになりまさァ。ですもの結句好いくらね。何のかまふ事が有るもンですか、その事なら御遠慮なさいますな。」

何さまそれもさうであると阿今強ひて辭みも爲りかねた。さらばとて市助の說にまたがひ、二人そろッて行くのも變であるとの所から阿今は兎に角伯母の家へ戻り、市助だけ一人太右衞門方へ行く事にした。

手を鳴らして女中を呼び、勘定を言ひつけると、意外ですこぶる勿怪な顏。まかも二人の顏色までがいつもとは違ふので、まばらくはぐづぐづする。

やうやくに急き立てて、然るべく挑ひをし、人力車も入らぬとことわッて、二人つれだッて門を出たのは彼是九時半にもなッた。

いつもとは違ふ妙な同伴、また妙な心もち、かうして歩くのも是きりかと阿今ただ一人の胸

第五

太右衞門はやく戸を鎖めたが、どうして何うして寐られない。ひとり火鉢の前に社にかまへて、くよくよと物おもひして居る門の戸をとんとんと叩くものが有つた、言ふまでもなく市助で。

「畑草なら明日にしておくンなせエ」とあらあらしく遣りつける。

「いいえ畑草ぢやありません。ぜひ御目にかかりたいのでして。」

「どなたです」と猶動かぬ。

「御目にかかると分かります。夜も一寸更けましたからあンまり大聲では。どうか御開けなすつて下さいまし。」

「だから誰だッてへンです。このごろは物騷だ。」

「ちよッ仕樣が無エなッ」と戸外では市助舌うちした。「それぢや仕方有りませ

ん申します、阿今さんの事てあがりましたので。」

阿今と聞いてぎよッとした。

すぐ吾を忘れて潜り戸の前、機外す間ももどかしく、がらり開けると何より

さきに芬と來る香水の芳香、とれは又、はてな。

「込み入つてますから、失禮、御遠慮なく上がります」と會釋しながら座敷き

に通ッて、「さて何やらいろいろ込み入りまして、申し上げにくうございますが、

一刻もはやくと存じまして夜中をもかまはず伺ひました。ええ、あなたさまが

阿今さんの親御さまでいらッしやいますか。」

素人にしてはをかしくにやけた男と太右衛門穴の明くほど眺めて居た。で、

幾分か素氣無い。

「さうでごぜェす。」

「あッさやうでございますか。さて改まッて申し上げますのも誠に面目次第も

ございませんが、實はあのわたくしは市助と申すものでムいまして。」

すこしあわてて、「何、市助ッ。むム、わかッた、道理で。已ッ」と唇嚙み占

めて、「ぢや御前さん、あの馬の——ンにやあの役者ッ？」

「さやうでムいます。」

聞くか了らず睨めつけた。

「ちッ、よッくもまア。いけづうづうしい、よく野面で。とれ、御前のためにはな、阿今はな。」

「さッ、それですから上がりましたので。まアよく御聞きくださいまし。」

「ンでッ、聞くも聞かねェも無ェや。手前の御かげでこの親がなッ。」

「いえ、そりや御もッともでムいます。ですから御わびに、このとほり假面をかぶりまして。」

「うそ付けッ、素顔ぢや無ェかい。」

「さう言葉尻を御取りぢや當惑します。まア段段に申し上げますからとッくりとよく落ち着いて。」

「眞似しやがるない。どン畜生でもこン畜生でも人の面せへ見りや落ち着けてやがらア。ンでいッ、落ち着いてらいッ。」

「なら、どうかとッくり御聞きをねがひます。ね、もし、どうか、あなた。それでムいませんと、ちッとも御はなしが片付きませんので、ことさら又阿今さんの御出での處について申し上げなければなりませんので。」

また太右衛門ぎよッとした。

「阿今がッ、あの伯母の宅には。」

「さア、そこを默ッて御出なさいましたので」と市助辯才すこぶる旨い。

今は悪口のみ言ッて居られず、「出て、ど、どこへね。そりや又それで何時頃でッ。」言ひながら眼は涙ぐむ。

「ですから段段に申します。」

「段段も階子段も、言ひねエ、ぢれッてエ早く。えッ何處へ、何時。」

「そりや御心配御もッともでムいます。まづ斯樣でムいます。」

「うムさうかね、なるほど。」

「御わかりですか。」

「いいえ。」

「困まりすな、どうか御氣を御まづめなすッて。今さら申し上げにくうムいますが、つひ不圖した事から御むすめ、御さまと御承知のやうな譯になりまして、この度のやうな御心配を御かけ申しました。何もかにもみンな私のわるいので ムいまして、決して御むすめ御さまの所爲ぢやムいません。」

親は正直、いくらか癇もちづまッて、「また御前だッて男一疋のくせに何も主ある女をそそのかすてへ法も無エぢや無エかい。なんぼ阿今の方からやいやい言ッて行ッたからッて、おいそれと好い氣ンなッて、ほんとによ、剛氣な好男子ぶッて、主あるものを浮氣にするにも及ぶめエぢやねエか。」

「さう仰やられても致し方はムいません。つひそれが若氣のいたりとか申すでとく、大概人さまに御聞きくださいましても御わかりになりますが、私も商賣がらには似合はず、手堅いとか何とか言はれて押ッとはして居りましたので。」

「うまく言ッてらァ」と冷笑する。

「いえ、まッたく然やうなので。」

「で、なンで、あんな……」

「ですから迷ひでムいました。と申して今の旦那さまン所へ入らッしやッてから後にあんな關係になりましたのでもムいません。」

「すると藝者してた時からかい。」

「でムいます」との一言は大きに太右衛門をしておらげさせた。

「今さら惚話じみて御はなしにくうもムいますが、まッたく其頃の事でムいます、あたくしの方からつまらない、馬鹿な事を言ひかけましたので。」

であらうと思ッたと言はぬばかりの顔つきで、太右衛門だまッて苦り切る。

「つひ深くなりまして、どうどういつか知らず知らず。堅氣に御なりの時、もう今度こそは思ひ切らうと幾度か心で心に異見しましたが、やッぱりそれであきらめられず、悪い事とは知りながら、つひ逢ッたり出會ッたり、とうとうこんな仕儀でございます。何も斯ももう御はなし申しておまいます、罪ほろぼしの一つとして。今晩かやうでムいます、御むすめ御さまがいきなり或る處からあたくしを御呼び出しでムいます。」

「ふゥム、あいつが、へェ何處からね。」

「まア、御聞きくださいまし、御つかひでしたけれど、またいつもの通りだと思ひましたもンで、そのつもりで御目にかかりに參りましたの。」

「だから、そりや何處だね。」

「待ち合ひでムいます、菊本といふ。」

「へェ待ち合ひへも役者呼べるのかね、あの藝者ばかりでなく」と物々しさうに尋ねれば、

にこり笑ッて、「さうでムいますとも。そこで御目にかゝりに上がりましたところ、あたくしもびッくりいたしました、御むすめ御さま、あたりまへで無い御顔色なンでムいます。」

「ほム、蒼く、えッ、紅く？」

「何しろ浮かない御顔色でムいます。それから何した譯かと段段に伺ひましたところ、何しろ是々の譯で旦那さまはじめ一人の親御さんにも怒られ、どッちへ行ッても立て逐ひに逐ひまくられ、仕方無く伯母さんとか云ふ方の處へ、ね、さよでムいましよ。」

やや輕くうなづいて、「立て逐ひにするッて爲ねェッて、どうにもかうにも手が付けられねェンだもの。已が無理したンぢやありやしねェ、伯母てへのに閉いて見てもわからア。」

調子大きにやはらかくなる。よめたと肚では安心して、

「いや、さよでムいましたかも知れません。」

「かもどころか。」

「へェ。」

「ひとゝほりぢやねェンだ。」

この罪の無い挨拶はいとゝ市助の腑にもこたへた。

「あゝ御もッともでムいます。」何が御もッともだか、市助自分にも分からない。

「それで、伯母さんのところへ一旦は御出でに爲りましたが、考へて見れば見るほど面目なくッてならず、のめのめと其伯母さんのところに御出でになるのもきまりがわるく、どうしても居たたまれず。」

「そりやすこし嘘らしいね。どうして那奴そんな面目ねェどころか、面目のめ

の字だッて。」

「いえ、さよでムいません。次第に落ち着いて考へて見ると、一旦の意地で親御さんに突ッかかッたのが何うも勿躰無い事だと心で心が承知しませんでね。」

ことさらに退だけでぷつりと切る。

「ほんとに左樣いふ氣が出たのか知ら。全く左樣なら、またまた人間なンだけれど。」ほくほくとして涙ぐむ。

市助見るにもいぢらしい。これも齊しく涙を浮かめた、その涙一滴が、無言ながら、何となく太右衛門の胸にも浸みた。最初とは打ッて變はッた心もち。

「それで、どうにも斯うにも居たたまれず、湯へ行くと言ッて胡麻化して、一散にあたくしに逢ひに御出でなすッたので。」

「何も御前に逢はねェだッて。」

「さ、それが大變なのでムいます。」

大變の一言はどれほど肝を抉ッたか、見る見る眼をさへ圓くして、

「大、どう何が大變で。」

「生命といふンでムいますもの。」
「生命ッ、生命がどうてへンで。」
「皆さんに面目無く、とうとうそれから思ひつめて。」
「ほム」と火鉢にまがみ付いた。
「とッてもう生きて居られないと。」
「ほム。」
「死ぬと思ひつめなすッて。」
「ひえッ」と太右衛門反りかへッた。
「ぢやッ、ぢやッ、ぢやッ、そんな飛んでもッ、えッ、馬鹿が何も死、死なずともッ、ちッ……ぢやッたか、死ンで。」眼するどく睨めつけた。
「いえ。」
「いえも無ェもンだ。」
「いえ、ま、まづかに。で、あたし（暇ごひだとて逢ひに入らしッたのでして。」
「で、ののめと御前が此所へ。」

「いえ、さうぢやムス……」
「來てるぢやねェか、だッてもよ。」
「いえ、さうぢや、何しろまァまづかに。」
「死んだのけッ、生きたのけッ。」
「ですからそれが……」
「死んだのかよッ。」
「どうもさう御急きでは。死ぬだけはまづ。そりや御安心なさいまし。」
「死なねェとえッ。」
「へい、大丈夫。」
はりつめた氣ががッくり抜けた。ほッと一息。あはれや又念押す。
「死な、ねェン、だな。」
「ですとも、それは。」
「ンでいッ、人ッ、様ァ見ろッ。」同時ぼろぼろッと泣き出した。
「そとであたくしも實はびッくりいたしましたので、そりや御心得ちがひ、飛

んでもない不了簡でございますと一生懸命止めました。」

「御め、御前がかい」とけろりとなる。

「さよで。」

「止めたとえッ。」

「さよで。」

「ふゥム」といよいよけろりとなる。

「あたくしにも一人の母がムいまして、その母の身と比べて見まして、さぞまア貴公さまが御心配なさる事と、實に人事とは思はれませんで」とさすが情迫ッて眼をぬぐへば、

いよいよ呆れたといふ躰で、ばかんとして眼を睜る。

「これまでの御心配の上塗りして、一際の御なげきを御かけになるのは決して褒めたこッちやムいませんと散散御とめ申しまして。」

「ほェッ、御前がかえッ。」

「へい、何も存じませんけれど。」

「そッ、それで何かな、思ひとまッたのを思ひつめたのか。」

「へ、何でムいますッて。」

「ちよッ、思ひとまッたのを思ひつめッ……ちや居ェ、思ひつめたのを思ひとまつたのかてへッたい、分からねェッ」と一人であわてる。

「まづ、さよで。何しろ元はと申せばあたくしがわるいので、死んで可いのならあたくしがそれこそ死んで宜しいくらゐでムいます。が、まア短氣は損氣でムいますからどうかそんな不了簡を御出しなさらず、皆さまが御安心なさいますやう、どうかあたくしの事は今日かぎりぷッつりと御あきらめ下さいまして、どうか……」

「待、待ちねェ、そりや御前が言ッたッだな。」

「へい、あたくしが。」

「はッて、これはなァ」と頸を曲げた。

「で、あたくしの歹かッたところは貴女さまの御迷惑に爲りませんやうに、男らしくあたくしも謝りにまゐりますからどうぞつまらない御心は御出しなさら

ず、旦那さまへも亦親御さまへもよろしく御わびなさいまして、酒の肴にをさまるやう、どうか御思ひなほしていただきたいものでムいますと、まァそんな風に御はなしいたしました。まッたく嘘言でも何でもムいません、はじめは一圖に死ぬとばかり仰やッて御出でしたのが、段段心を落ち着けて、あたくしのやうな奴の言ふ事でもどッくりと篤く御聞きくださいましたところで、どうやうやく、もし御安心なさいまし、御納得になりまして、あたくしの言ふとほり酒のとほりにならうとの思しめしになりました。」

太右衛門夢路に浮く感覺、今が今まで憎みぬいた市助が、はて扨神か佛樣か。ちッと見つめて居る内に又も涙は露一杯、口を聞くにも呼吸さへ切れる。

「ふゥむ、それぢや心からあの阿今が酒の肴へもどるて、氣に、あの、その、御前……」もはや疎末には言へない。「御前さんに誤見されたンでッ。」

「さよ。」

「あの旦那にもあやまるッて。」

「さよ。」

「あの己にも苦勞させねェて。」

「さよ。」

「あの短氣も出さねェで。」一分づつ立てつづけ。

「ちえッ、うム、市、市助さんだッけ、ちえッ御前さんはなァ。」二三度つづけて頭を低げて、「ども何とも、いやッ、わけェのに何うもはや。あやまるッ、わたしが悪かッた、ええ悪かッた、罪だッたッ。」まばらく其儘泣き入ッた。

「わるかッたよ、勘忍しねェ。實は、そのまッたくの所、今が今まで御前さんを仇敵だと思ひ込んで、どやしつけても呉れよかと、あッあ、歹、歹かッたッ。どうして何うして阿今のためにも生命の親、それどころか私のためにも生命の親、御前さんが異見してくれたばッかりで、も、も、何と言ッたら好いかまァ。そりよ、片時でも一時間でも、怨んだなァ、ちえッ罪だ。よ、よ、勘忍して御くんなせッ。」

市助かへッて氣の毒に爲るくらゐ。その心根の不愍さには我慢する氣でもはふり落ちる涙を、まばしば押しぬぐッて、

「いえ、それちや却ッて痛み入りますよ。あたくしの歹いところを、言はば御わびするだけで。わるい事はあやまるのが人間の道とか申して。」

「だから私だッてあやまるン。ええ男だ、御前さんは。雨降ッて地かたまる、御前さんが有ッたばッかりで、うひひッ、私も肩身が廣くッ、わすれやせんよ、御前さんやッ。で、阿魔の奴、どこに居ますかえ今。」

「その事つひ言ひ落として。伯母さんの御宅へ一旦御かへし申しました。」

「はッあ、やれやれそれは何うもまア。ぢや伯母ン所に、ええ安心法やした。」

感に堪へぬといふ躰で、

「一人の親が有ンなさるッてね、よく夫で思ひやりの、ああ出、出來ねェ感でがす。いくつでね、年はねェ。」

「あたくしですか」と微笑する。「いけません年ばかり取りまして。もう六でございます。」

「六ッ、へェ二十六？十六ッて事も無からうから。」

「へい、二十六。」

「ひえェ、わッけェなア、ほんとだ、なるほど化け物だッ」と無邪氣に腹で思ふ儘を。「ああ二十六、二十六、それにしろ驚いた、感心なもンだなア。」ほれぼれとして眺め入る。

「御わかりになりまして何しろあたくしも本望でムいます。で、ついでに御むすめ御さまを御つれ申したいのでムいますが、段段に夜も更けましたし、まして伯母さんの所に御出でなンでムいますから御安心でムいましやう。いづれ又御つれ申す事は明朝の事といたした方がよろしからうと思ひますが……」

年よりは氣がみじかく、「何そりや今夜でも。ただ御前さんの御都合が。」

「何あたくしは何うせ。」

「ちやァ、どうか今夜ねェ」と一圖にそれと思ひ込む。

心を察して快く諾した。起つ、送る、太右衛門ただまでまで。送り出しての獨言。

「良いものと野合きやがッたッ。」

第六

乗りかかつた船、市助いつそ序の事とすぐ太右衛門方から阿今の伯母の家へ飛ばせ、まだ戻ずに伯母と咄して居た阿今に逢ッて、太右衛門方の一伍一什を告げ知らせた。

傍で逐一に聞いて居る阿定も阿今が一旦死を決したとのおもむきは今はじめて市助から聞いたので、また一入におどろいて、それにしても又踏みとまッて、よくまア若いのに、さかも商賣がらに似合はず、殊勝な意見をしてくれたものだと心からして感心する。其所は肉身の情あひで、一ッには阿今が命びろひした事と、二つには太右衛門が嘸かしよろこぶであらうとの事と、それやこれやを考へ合はせて、かたじけなくて堪まらない。

阿定市助に散散禮を述べたが、言ふ事は殆ど太右衛門のと變はらない。

「御わかいにも似合はず、よくまア其咀嚼を御付けなすッてねエ、御かげさまであたしも安心、人幾人かの命びろひができましたよ。さぞまア此女の親父も

さぞ。」

「まッたく御堅い御方でいらッしやいますからね、實に御いたはしうムいました。」

「そりや本當にむかし氣質の頑固一方なンでしてね、なるほど此阿今もわるくはムいますけれども、又一方もあンまりがみがみ言ひ過ぎますもンでね、小さくッて濟む咄しがおッそろしく大きくもなりますので。だが、あたしどもはじめ一同あなたの御恩は忘れませんよ。」

言ふところへ門口で人力車が止まッた。と思ふ間門の戸をどんどんどん。

「おい阿定、己だ、明けて」と言ふ聲は太右衛門で。

「あらまッ、おとッさんかえ」と阿定またびッくりした。

「分からねエかッ」と最うぢれる。

扨もと一同目を見合はせた。阿定すぐ起ッて戸を開ける、待ちかねて太右衛門あわてふためいて飛び込むはずみに、こッつんと兀頭を潜りで打ッたが、痛いとも言はない。

「もし旦那、どうか駄賃を」と後ろから車夫に聲かけられて、目を圓くして、「おやッ、まだか。」

「へい、まだ」と車夫はにやにやする。

「ほい、まッた。出して手にやこのとほり、あすれた、握ッてたッけ。」

「いやだよ又」と阿定その錢を取り次いでわたす間に太右衛門つかつかと座敷きに通ッた。

一目阿今を見るよりも平張るといふ樣にどッかり坐ッて、睨みつけて無言の儘、たちまちに涙ぐむ。

そこへ阿定も立ちもどッた。

「どうしたのまア、追ッかけて來て、御前この、あの、市助さんに御挨拶も爲ないでまア。」

阿定に注意を加へられて、やうやくに心付く。

「そッ、そッだッけ。いや是は御前さんさきほどは。」

「さきほどは」と市助も答禮して、「夜ふけにまア御老躰で、どうなさいました

ので」。これも心配さうに聞く。

阿今うつむいたぎりぐッとも言はぬ。

阿定煙管に煙草を詰めたなりで、火を點けやうともせず、持ッた儘。

太右衛門何とも言へぬ顏色。眉間を愁め、眉つりあげ、顏はさながら火の如く、いつものとほり涙もろく、急き上げ急き上げ、さめざめと泣く。

いよいよ一同氣が揉めて、

「もう何も御前、市助さんの御はなしも聞いたらうにね、でもそれとも何うかしたの何か。」

かぶりをふッて、「駄目だもゥ。」やゝさばらくは齒を噛んだ。

「今日が已の死ぬ日だよ。」

「なン、なッぜさ。」

「なぜどころか。どうしたら斯うも物が齟齬に行くものかな。仕方がねエ、これだけの運なンだ。」

「だから何うしたてへンだよ。一人でばかり承知してたッて、根ッからちッと

も分かりやしない。氣にならァね、御はなしな、つまんでやも」と阿定までが急き込めば、

「ほんとに何ですか、どうか伺ひませんではね」と市助も心配顔。

「どうッて斯うッて、嗚呼この已も何ともはや。だッて、御前、御前さん、旦那が今還ッて來たンだ。」

「旦那がッ」と阿定鸚鵡がへしにした。さすがの阿今も此時だけはきッと面をあげて見た。

「旦那がッ」と阿定二聲ばかりつづけて、「あの御前ンところへかい。」

「知れた事たな。どこへ、外へ來るけッ。わからずやッ。」

「御様だ又、一人で承知しておこッてらッ。來てどうしたの。」

「分からねェな、あン畜生も。」

「誰がさ。」

「旦那がよ。」

おやと一同また呆れた。風雨交代意外の口上、ただ譯が分からない。

「還ッて來てな、斯ういふンだ。さッきは如彼も言ッたが、阿今を戻すのはすこし子細が有るからあらためて断わるッて。」

「おやおやおや。」

「本當におやおやだ。御前だッておやおやだろ。已だッておやおやだ。ねェ、市助さん、御前さんだッておやおやでしよ。」

「なぜですね。」

「それが斯うなンで。何とか云ふその待ち合ひ、その今夜御前さんと阿今と話しをしたとの。」

「なるほど菊本」

「それそれ、その菊本、そこの家の前とかを今夜旦那が通ッたンだッて。」

一同耳をかたむけた。

阿定へ向かッての方がぞんざいな言葉でも管はないので咄し可いので、

「還ッてな阿定、その御前、その市助さんとよ、阿今とがな、つれだッて歩いてるのを見かけたとよ。」

「そりやさうだね、聞いたね、あたしも其とほり、此方からも今ちやんからも。それがどうだてへの。」

「だから分からねェぢやねェかおい。かういふンだ。時も時、今夜も今夜、逐ン出された其晩に、あの眞似たァおどろいた、御前が、てへのは已の事たよ、可いか、御前が異見するてへからさうかと思ッてた、よもや如此とは思やしねェ、それだのにあの樣たァあンまり呆れて物が言へねェ。御前が異見するてへのも夫だから虛言にちげへねェッて。」

「と言ふの、旦那が」と阿定さらにたしかめた。

「だッからよゥ。」

「ほんとだねェ。だが、志かしそりや是是だと有り躰に御前言へば可いよ。」

「愛ふどくして、「言ッたァな。」

「市助さんの骨をりや何か一切をもかい、のとらずくはしく。」

「言つたァな。」

「で、どうだてへの。」

「わからねェンだ。」

「どうだからッてへの。」

「ちッ、めんどくせェな」とむしやくしやする。

「察しねェ大抵。」

「わからないやね、それだけぢや。」

「ちよッ、わからずやそろひだなァ。むしやくしやして己だつて言ふのもめんどくせェや。」

「そ言つてる内に御言ひな。言はなきや猶分かりやしない。」

「めんどくせェな。何しろ旦那の分からずやが聞かねェンだ。今までさんざん他の持ちものを玩弄にして居やがッた馬の足がなんで今さら然つめらしい異見を阿今に爲て、本心に立ちけへらせるてふ法が有るもンかッて。」

市助すこしむッとしたが、默して居る。

「そりやひどひや」と阿定が。「この方を見ないからそんな無茶をも言ふンだよ。」

「そ、そだともよ」と太右衛門力を入れて、何となく勇氣付く。「言ひてェ事は

かり言ふ、あんなに分からねェたァ思はなかッた。錢金ばかりが惜しくつて言ふンぢやねェ、可哀さうにこんな、若ェにめづらしい物の道理のよオく分かッた人をつかめへてよ、ただ馬の足だから何うだとか、猫の尻尾だからどうだとか、好きな熱吹くのは、そりや已や旦那だろが何だろが、大まちがひだと思ふンだな。」

「さうともさ。そりや先方がわからないてへもンだ。」

「そだらうえッ。それに第一が那ぢやねェか、この上の罪は有りやしねェ、善人を悪人とするなンて。そりや人間、神さまでも無しさ、うたぐッたり分らなかッたりする時は又その時さ、さうぢやねェかおい、分かる時には奇麗さッぱり分からなくッて何うなるもンか。そりよ卿前、わからずやめッ、何てッても分からねェ。」

吾をわすれて拳を握りかためて居る。市助賀に心うれしい。それながら應待役は阿定に讓ッてすべてまづ默ッて居る。

「これまでの咄しむきぢや隨分分かるところは分かる人らしかッたがね、それ

でも何か譯が有るのか知ら。」

「で無ェンだな。」

「ただうたぐるのかね。」

「だから只わからねェンだな。言はゝこの市助さんは生命の親だ、己たちの身に取ッて、な、そッだろ。」

「ましてよく異見までして、手まで切れやうどさへねェ。」

「そ、そこだッ」と手をひろげて、「そこンこ處だ。可い事は可い、わるい事は又いだ。前のわるかッた事を後悔してよ、それだけの恩を被けてくれたからにや、又その恩わすれるのは人で無しだ。可愛さうに、そりよ何ぼ何だからッて、見さけへも無く、わるくばかり言はれちや、旦那だろが何だろが、己だまッちや居られねェンだ。」

この江戸ッ兒氣には市助もそぞろに感涙もよほした。

「ね、そッでしよ、市助さん。」

「どうも恐れ入りました。」

「わたしや御前さんに御ベッか遣ッて言ふンぢやねェ。な、阿定。」
「そりや物の道理だからね。」
「だろ、えッ。だからよ、分からずやが何てッても分からず、此人をもわるく云へば、阿今をもことわると云ふ、頑固一方強情一途に押ッとほして見ると、己だッて業が沸えらァ。恩は恩、道理は道理だ。べらぼうめ、人を見そくなかッたか、目くされめ。貧乏してたッて腹ン中ア奇麗さッぱりしたもンだ。石は石、金は金で、何でも正直にやッてるのを分からねェかいッ、唐変木。」
「ま、そ言ッたのッ」とあわて込む。
「何、そんなにも言やしねェ。」
「すこしは言ッたの。」
「すこしは言ッた。」
「まッ、どうもね。何てッて。」
「だッて口惜、いめェましいぢやねェかあンまり。志めにへや己だッて面倒くさくなッちやッたな。だから斯言ッてやッたンだ。そりや旦那、何ぼ何でもあ

んまりだ、己がこれまでに云ふ、己の生一本なのを知らねェのかッて。」
「すると。」
「かう吐かしやがる。正直だらうさッ、と乙力にせせらわらッて、そのかはり騙される性質だろとよ。つまり騙されて、さう思ッてるのか、でなけりや嘘言吐いてるシたてへ口ぶりなンだ。だものを、己だッてむッともするぢやねェか。」
「そのうへ又何か言ッたの。」
「言ッた。腹が立ッてたまらねェンだものを。」
「何てッて。」
「で、わからねェなら何うでもまろえ、御前さんあんまり分からずやてへもンだ、己だッて恩は知ッてる、何で詭言を吐くもンか、そりよ何うでもうたぐるッてへのなら勝手にいくらでもうたぐるが可いやッ。と言ッて、取ッて置きを出した、つひ。」
「取ッて置きとはえ。」
「腹ン中の取ッて置きよ、蔵ッて置いた文句をよ。」

「へ、ェ何て（……」
「唐變木の稲子木めッ。」
「あらッ」と半ば噴き出しかけて、「そ言ッたの、露出しに？」
「言ッた。」
「まァ何うも。」
「云ふ氣も無かッたが、つひだッた。すると怒ッたな。」
「そりやさうさ又あんまりだもの。」
「だッて先方もあんまりだな。」
「だけれどもさ。怒ッてどうして。」
「眞紅ンなッてな。己もまッたと思ッたが、口へ手やッたッてもういけねェ。で無くても猿公見たよな御面だろ、眞紅ンなッたからそッくりだ。」
「いやだよ人ッ。」
「ふるへ出してな。」
「ああ。」

「おッそろしい眼をしてな。」
「ああ。」
「何、唐變木の稲子木めと言ッたなてへンだ。もう已だッて仕方がねェや。言ッたがどうした、唐變木だから唐變木だてへンだいッと遣つたンだ。」
「大變だねェ、まァどうも。それから。」
「恩知らずの老爺めと言やがるから、ンでいッ恩知りの太右衛門さまだいッと遣ッたンだ。」
「こまるねェ、短氣にも。」
「短氣だッて狐だッて、だッて御前、それだッても。」
「もうかまァねェぞ」と言やがッた。
「かまァなくッても可いやッと。」
首をすぼめて小聲になッて、「うッかりと言ッちやッた。又口を抑せへたッて
もういけねェ。」
「ふすン、いやだよまァ。」

「冗談ぢやねェ。」

「あれッ、人の言ふ事を言ッてるよ。ほんとにさ、冗談ぢやない。」

「ンでッ、眞似するないッ」と聳ばなし。

「すぐと御前、ぶんぶんとしてな、歸ッて行くンだ。傍に人でも居りや知らねエ事、己にや何うも止められねエや。餓鬼だし、邪てやがるだろ、波奈(下女)だッて止めに出ても來ねエ。その内に歸ッちやッた。」

一座ただ呆れはてた。

「己もうッかり口が辷ッちやッたンだ。だが、どうする事も爲らねエや。たから、よ、もう、己と彼奴との縁もな、とうとう是で切れたンだ。」

言つて悲然として下を向く。市助腹では氣の毒である。また憐くもある。が、どうも策が無い。

「何しろ飛んでも無い事がまた一つ生きましたなァ。やッぱり今度もあたくしが根なンでしてねエ、ども困ッちまひましたなァ、どうしましよれ」と市助策を阿定に問ふ。

「どうも ね。やッぱり謝るンでしよね。御わびの鈴生り珠數つなぎだ。」

「あやまるッて」と太右衛門生きかへッたやうに言ふ。

「そぢやないか。」

「だれに。」

「きまッてらァね、旦那に。」

「己がか。おら否だ」と屹となる。

阿定舌うちしてだまッて了ッた。

社にかまへて市助腕を組む。阿今そろそろ辷り出した。

「おとッさん、分かつたろ、さう分かつた人でもあるまい。隨分の分からずやだと、いくら分からなかッた御前にだッて今夜はよく分かッたろ。」

阿今大得意で、分かッた分からないの勢ぎろへを始めた。

目をぱちくり。「分からねエ分からずやだと分かッたて。」

「わかッたろ。あたしが、だから隨分不斷つらいだろとも分かッたろ。分からずやに分からない事言はれるンだもの。」

「待ちねエ、分からなく爲つて來た。何がどう分かッて分からねエッて。」

「いえさ、あの分からずやン處に居るあたしも隨分相手があれだから、つらいだろと分かッたろてへ事さ。」

「うム、わかッたよ」と志ほはとなる。

「もう破れかぶれぢやないか、伯母さん。肝心の御とッさんの方から打ちこはしちまッたンだもの。」

「そりや御前、あやまり次第で。」

「いやだァね」と言ひ放ッた。

「ですが、そりやどうもね」と市助やッと口を開いた。「あたくしは此伯母さんと同じ思慮でムいますね。」

「あやまれてへンですかいッ」と太右衛門冴えかへッた。

「いえ是非あやまれと御すすめ申すンでもムいませんがね。」厄れ物にさはるやう用心して口を利く。

「その方がをだやかかと思ひますね。」

「否、わたしは真平だ。それよりは最う仕方が無エ、道道も私かんげへて來たンでさ、あらためて、その御前さん、市助さん、相談してエ事が有るンで。」

「何ですか、そりやもう及ばずながらも。」

「言ッちまを、みンなも其所でよッく聞いて居ねエ。

「外でもねエ、わたしや此とほりの氣性だから、思ふ存分ぶちまけて了へやすがね、何ともう此とてものやぶれ序に此阿今とね。」

言ッて阿今をぢろりと見ると、阿今これ亦意外に襲れて、熱心に此方を見る。

「ね、どうか、その、ね」とさすがにはッきり言ひかねた。妙な顏して妙に笑ふ、はにかむといふ躰で。

「御むすめ御と何ういたすンでムいますね」と市助すこしく待ちかねた。

「どうてへ事も無エンだけれど」と又きまりわるさうに微笑して、「あッ、だが肝心の當人から聞いて見ねエぢや。それだ、ぼんとにその事だ。」一人でただ承知する。

「阿今、もう御前に小言も何も言はねェやさ。ところで一つ御前の腹ァ聞いて見るンだけれど、どうだ御前、もうどッても分からずやの方へは歸らねェ氣だろな、えッ。で、結構だと思ふンだ。」

呆れるほどに打ッて變はッた。阿今つひぞ無い笑ひ顔。

「だともさ。」いきほひ好く返答して、同時に阿定と市助とを一目ぢろりと見比べた。

「で好いンだ、大よしだ。ところで御前、どういふ氣だ。」

「何がさ。」

「的よ」と顎で市助を指す。

覺束ない暗號なので、わからない。

「的ッて何。」

「どんちきだな、ぢれッてエ。」

「だッて分からないもの。」

「分からねェとな。わからずやッ。」

「ふッ、きや（否）だよ。また唐變木の掛子木は御冤かうむるよ。」

「生言ふないッ。取ッて置きだ、いくつ言ふもンかッ。」

はッと市助笑ひ出したが、太右衛門にとりともせぬくらゐ、それだけに熱心きはまる。

「分からねェか、まだ。」

「だッてもさ。」

「ちよッ餓鬼だなア。仕方が無ェ、言はう。うふッ、言ひにくいて、是でもな」と額をつるつる撫でまはして、「的てへのは大將だな。」言ッて市助を指した。

まだ誰にもわからない。

「それが何うなの。」

「ち、仕樣が無ェなッ。もう此上は大、大將ンとこへ行く氣だろッてへンだい。」言ふ内に汗が生際、兀げて居るので境界は分からぬが、まづ其邊へ浸み出した。

意外とも、意外とも、阿今の方がまごついた。阿定だまッて呆れて居る。

「おとッさん、まアそれが可いと思ふのかい。」千雨といふ笑ひ顔。

「ま、御前はよッ、うッす、でも夫でも言ひ難ッ、はゞかしいかッ。」
「何さ、いやだよ。だが、御前の丁髷はさア。」
「だが、やぶれかぶれぢやねエかッ。」
「そりや大きにさうだとも。」
「ぢや、やッぱり、ぶすッ、己の眼はちがはねエな、やッぱり其、この、大將ンとこへ行きてエンだ。うム、それも無理は無エ。べらぼうめエ、意地だ。己もう邪魔ァ志ねエから、さうならさうとはッきり言ひねエ。己すぐ大將へ咄しを爲て見ら。すりや己も生きけへる。死、死ぬにも及ばねエ。」
何で阿今がかぶりを掉らうか。さすが恥かしさうに微笑して、「あたしやもう。」
「ふム、もう。」
「もう。」
「何だな、牛ッ。もう、何だ。」
「もうね、親方さへね。」
「ふム。」

「可いてッたらね、どうせもう。」
「可いンだなッ。」
別人ほどに悲氣が好い。
「うッふ、親方、あのね、どう。」われと自身吹き出した。「いや、どうだのもうだのッて、牛馬の比べッこぢやあるめエレッ、まつね、親方。」
「へい。」
「分かンなすッたろ、今の事、二度言はねエでも。」
「わかりました。」
「ぶ、ぶめた。阿今、可いとよ。」
「あッ、もしあなた」と遁ッた。
「何……何。」不審顔。
「わかッたかと仰やるので、只わかッたと言ひましたので。」
「で可いぢやねエか。」
「御はなしを聞いて、その筋は分かッたと言ッただけでムいます。」

「は、はッてね。」
「承知したとは申しません。」
きッと云はれて、びくりとした。
「ぢや早く承知したと言や可いのに。」
「いえ、それは何うもちと。」
「何だッて」と思はず聲が甲走る。
「一寸あたくしも即答は。」
「そくたふッて。」
「即坐の御返辭でムいます。」
「だからよ、爲たッて譯も無エ。」
「でムいませんのでして。」
「あの、いけねエッてッ。」意外にびッくり、眼を据ゑた。
「さッ、何だか申しにくうムいますが、すこッし思はくがムいますので、どうも。」

「いやだてへのッ、えッ、いけねエッてへのッ。」
あわてれば落ち付いて、「いやと申すのぢやムいません。が、どうも一寸その、これぱッかりは應それと。」
「へへへへエ、」と暫時茫然吹きながして、「こりやどうも呆れッたッ。」
阿定さもこそといふ顏つき。阿今ほとんど呼吸も吐けぬ。

第七

「なッ、なぜ可けねエのかね」と言ふ眼はよほど稜立ッた。
「こりや私や分からねエ。もともと御前さん否で阿今とあんな中になッたッぢやあるめエ。ね、さうだろ。さらさら否ぢやねエンだが、旦那ンとこへ歸してエとの義理だてからまづ手を切らうと言ッたンだろ。」
「そりや、さうでムいますとも。」
「ところが今言ふとほりの咄しで旦那の分からずやとは破談になる、もう御前誰も義理だてもねエぢやねエか。それだのに、可けねエッて言ふ、私にやちッ

とも解せねェな。」

「そりや御前、この方にだッて思はくッてへものが」と阿定がすこし口を出すと、

「だまッてろいッ、うッとしい」と一呼吸に遣りつけた。

「己から見ると斯う思はれるね。やッぱり御前さん口のさきばッかりで、腹ン中は阿今を否なンだ。なに、さうさ、さうだとも。さうで無ェ事が有るもンか。で無ェのなら誰だッて、天下晴れてだ、二つ返辭と來るとこぢやねェか。」

すこしく前へ乗り出した。

「さッ、否なら否で可いや、否だと言ひねェはッきりと。ぐづぐづは真平だ。また否だらうわさ、のッぺりした御平の長芋か、すり剝けた瓢箪見たよな奴と野合たり何かさやがッて親にせへ恥を掻かせる間ぬけ阿魔だもの、どうせ御前のやうな、歴然とした御役者さまの氣にや入るめェさ。へン役者もねェもンだッ、河原乞食の、男地獄の、白瓜めェ。」大氣焔また燃えあがる。

「悪口は御よしなね、おとッさん。」

阿今が聞きかねて宥めると、食ひつきさうな顔して睨んで、

「のろけるないッ、二本棒。親の身ンなりやな、これ腹が立たいやいッ。」

「ね、おい、御役者さま、何どかはッきり言ひねェな。だんまりの幕ぢや無ェからね。別かッたとも、別かッたとも、すッかりと別かッたい。御かげさまで此年よりも路頭に迷ひまさいッ。とッても最う、どうせもう無ェ生命だ、行き掛けの駄賃だ、さッ御役者さま、否と一言言ひ切りねェ。」

形勢まッたく凄くなる。ぢりぢりと太右衛門つめ寄せたが、市助一向動じない。

「おかた有りませんな」と唯一言。

「何が仕方無ェンだい。」

「ども仕方有りません。言ッちまひます。」

「うム、言ひねェ。」ぐッと拳をにぎりかためた。

「あたくしが御娘御と此處で仰やるとほり一處ンなれば、殘念にもその旦那の言ッた事が中る事になりますがね。」力を入れて刻んで言ふ。

「どう中るッてッ。」ちと氣が抜けた。

「それ見た事か、戻さなくッて可かッた。親父も親父だ、正直を看板に懸けて人を一杯食はせやうと思ッたンだ、その術に己が掛からなかッたので仕方なく奴等とうとう化けを出して了ッたと、さア、かう取られたら如何です。」

太右衛門ぐッと行きつまッた。

たたみかけて、市助、「あたくしも實に殘念です、こんな家業してますから、さう思はれるのも致し方ムいませんけれども、言ひ草にも困りますて、馬の足が何でそれまで玩弄にしといて意見なぞ爲るもンかと旦那が貴郎さまに仰やッた御口上、その言ひ分を立てませんでは私も家業にさはります。」

太右衛門あよげて、あよげ返ッた。言はれて見れば一句も無い。またまた涙さしぐませた。

「そりや、其所ンとこも成るほどな。」言ッた切りで黙り切る。

「いかがです、さうぢやムいませんか知ら。そりや私だッてもともと是までの

關係に御むすめ御さんと爲りましたくらゐですもの、實ンところ御ゆるしの出た上は夫こそ二つ返辭で有りがたいと言ひたいのは山山でございます。が、くるしいものは浮き世の義理、いやしい家業こそしてますが、その浮き世の義理一つで、さ、どうぞ其所ンところを悪しからず御承知願ひます。決して、決して御むすめ御を否たの何のといふ、そんな水臭い了簡ぢや、そりやムいませんからね。」

阿定ほとほと感に堪へて、ひとしく共に涙ぐむ。

「どうもまア、真個に筋道の立ッた御はなし、あッ實に感心しましたよ。御もッとも、御もッとも、實に仰やる事は一一もう御道理でムいます。あなただって是から花の咲かうてへ身躰、ね、さうでさね。」と言ひかけて歎息した。

「ああ浮き世の義理かなア。ほんとにさ、こんな分かッた方、あたりまへならば頼んでも願ッても今ちやんと一所ンなッていただいて、大安心も爲たいのに。」

心もちは太右衛門亦爽はらぬ。去ほ去ほとして、「阿定、御前もさう思ふか。」

「思ふとも、ほんとにさ。」

「己だッてさう思はァ。」堪へかねて眼を擦る。

「さう仰やられますと、また一入御氣の毒でたまりません。ただ何うぞあしからず、御つきあひだけは爲せていただきますやう。」

「さうですともさ」と阿定が返す。

太右衛門きく〻く泣いて居た。

「おら、どうしよの、阿定。」

「何をどうさ。」

「旦那とも縁が切れ、此人にもことわられ、言はれて見りや夫も至當だし、分からねエ事は言へず、と云ッて何處へかぶり付く所も無し、ど、どうしたら可からうな。」

きをれて如何にも哀れである。見るにもそぞろいぢらしい。

「だからさ、過刻も言ッたとほり旦那も一旦さう爲ッたッて、また謝辭の入れ次第で、其所ンところは何うにでも。」

つと遮ッて、きッとして、「そりや否だ。」

「あれ、ま、強情を、まだかえやッぱり。」

「それだけは死んでもだ。」

「どうもまアね、言ひ出すと是だから。それほどまッかり威張るなら何も泣くにや當たらない。」

「だッてもよ。ふるふる否ンなッたンだ。」

「誰がさ。」

「ちえッ、否ンなッたンだ。」

「だから何がさ。」

「世の中がよ。」

きろり見上げる眼の色は怪しく凄く變はッて來た。

「氣味のわるい目を御しでないよ」と氣味わるさうに阿定が言へば、

更に白眼を露出して、「ぢや斯うかッ」と睨めつけた。

阿定いくらかぞッとした。

「何の眞似するンだね、本當にさ、冗談ぢやない、馬鹿馬鹿しい。」

「馬鹿馬鹿しい奴が有るもンか、聞いて見な市助さんに。」晩みは此人の商賣がらだッ。」その調子どうも普通でない。

阿定はしばらく見つめて居て、更に阿今と顔見あはせた。

「今ちやん、何だか變だねェ。」

「さうさね、よッぽどね。」

「またいつかの病氣が始まッたンぢやないか知ら。」心配さうに首を曲げれば、眉根を寄せて、「さうかねェ。」

太右衛門その實發狂の質が有ッて、掌て大きに發作して病院にまでも入れられた。その時の事を思ひ出すと、もしや又それでは無いかと身の毛が逆つ。

太右衛門げらげら笑ひ出した。

「阿定、なァんの、心配するなよッ、どうせ活物には定まる餌ありだ、何苦勞する事が有るもンか。神さまが覗いてら、な、神さまが。それそれ御前の後ろにやな、照り燒きの神さまが覗いてら。好い茅香だぜ。あははははは。」

にがり切りながらも涙ぐんで、「ほんとにまッかり御爲よ。どうしたッだねェ。

のぼせちや行けないッてば。」口の中で、「又はじまッたのか知ら、まア、ねェ。」

阿今もさすが涙ぐむ。

「伯母さん、どうだろね。」

「どうも、よッぽどね。いつでもだよ、まやァまやァしてるかと思ふと急に發作るンだもの。」

「をかしいのね、よッぽど。」

破裂したやうな大聲で、「宇治は茶どころ」とだしぬけに唄ひ出されて、又一同が仰天した。

「あれさ、まア、まづかに御爲なね」と阿定むしろ叱りつけた。「夜ふけだのに、まア、近所へ對してもさ。」

「いけねェのかッ」と眞面目になる。

「御ふざけでないよ、まア。ほんとによッく御前、心を取り直づめなけりや可けないよ。えッ。一概に苦勞して、身躰にさはらせたからッて詰まらないからね。可いかえ、あンまりのぼせるとね、身躰にさはるからね。」

まじまじとして、「身躰にさはる？　だ、だれの。」

阿定たまらず又涙。

「御前のぢやないかねエ。」

「己のか。」

「あいよ。」

「己の、此所、此所、此邊かな。」言ッて頭や胴を撫でた。

舌うちをして、「ちッ、とうとう眞物だ。こネッちまふぢやないかねエ」と阿定は大方泣き聲である。

「己のなら管やしねエや」とすぐに又泣き出した。「己のなら何の業ッ。ただ阿今のでせへ無エのなら。」

「ええもッ」と阿定袖を顏。

一座愁然として了ッた。

「何を泣くンだ、べらぼうな。よッ阿定、なッ阿定、泣くなッて、ば、ばッかなッ。をいをいと笑へやいッ。ね、市助さん、物の道理がさうでごしよ。でな

けりや政府に御苦勞も絶えずさ、ねエ、分からずやも烟草の荷イおくッてくれるンだ、うッははは。」

一同ほとんど返辭も出來ない。ただ顏を見あはせて居る。

「うッす、啞の寄り合へだな。みんな默りこくッてよ。阿定、おいこれ阿定。」

「何だねエ。」

「御客さまが御出でだのに、手前も何と氣が利かねエな。」

「なぜさ。」

「えへッ、とぼけてらア。そんな根性ぢや出、出世できねエぞ。酒、御酒、御神酒てへものを出さねエかい。」

「無いよ」と素氣なく云ふ。

「なに無エ？きッと無エか」と眼を据ゑた。

「無いよ。その上、また夜更けだね、酒屋起こす事もできないやね。」

「何、できねエ事が有るもンか。叩き起こしや起きらア。それでも起きなかッたら火事だッて言へ。」

「そんな馬鹿な事が、どうして御前。」

「手前できぬエ、なら己が行く」と起ちかける。

「まッ、御待ちよ、ほんとに。」

涙一杯の眼でつくづくと見て、「ね、どうか氣を御まづめよ。ね、御前のぼせてるンだからね、氣をまづめないと、それこそ又氣ちがひに爲るよ。わるい事は言はないから、もう寐る事に御爲。御酒は又あしたの朝、ね、あしたの朝、ね、さう御爲よ。」

われや他愛なくとッくりと聞く。その姿のいぢらしさ、他人の市助すら正面からは見て居られぬ。

いはんや阿定、又さすがに阿今。身を斫られるほどにつらい。

今といふ今の刹那、阿今實情の涙である。口さきでは手あらくも云ふ、何にしても肉身を分けた父の事、まことと、まことと悲しくなッた。

今にして市助に言はれた事、不孝して親が萬一の事でも有ッたなら其時はどれほどに寢覺めがわるいかとの一言、その一言が肝にこたへて、まかも其市助が目の前に居る事とて、何も今は言はぬその人が猶わが身を無言で睨むが如く、五躰冷熱の感が上下した。

太右衛門萎れ、萎れかへッて、「ぢや明日の朝きッとかい。」まるで小兒見た樣にあどけなく言ふ。

「ああ明日の朝きッとだよ。きッとだから嘘、今夜は機嫌よく御寐よ。」

「うん」とうなづいたが、又何かすこし考へた。「ちィッとで可いから飲みてエンだがなァ。飲、飲めねエのかなァ」と泣き出した。

「こまるよッ、それぢや御とッさん」と阿今たまらず押し宥めると、つくづくとわが子の顔を見つめて居たが、「これ、阿今、なんで泣く。御前が泣、泣くとな、己もな、なさ、け、なく爲るぞ、やいッ」と埒もなく又をいをい。

「わるかッたよ、あッ、あたしが」と始めて懺悔の阿今の聲は大方うるみ切ッて走まッた。「よウ、氣を御まづめよ、まッかりとして御出でよ。よッ御まづめよッ。」

「泣づめるよ」と泣く。

「それぢや靜まらないからさ。」

「ぢやァ御前泣づめてくれよッ。」

ちッと言ッたまま阿今その場へ泣きたふれると、太右衛門びッくり摺り寄ッて、嗚呼見るさへ涙の種、阿今の背中を撫で擦る。

「これ、おい、どうしたよッ。腹でも、あの痛ェのか。」

阿定隅を向ひて只咽ぶ。市助は唯冷汗。

「腹が痛けりや萬金丹、可いかはやく治せよゥ。うッ、うッ。御前がな、御前がな、わづらッてでも死んだ日にや、己氣ちげへになるぜ、おい。」

慘の極、酷のかぎり、氣ちげへになるとの一言を嗚呼誰が涙無くて聞く。

阿今九死万死の悲歎、總毛起つ、ふるへあがる、果は聲を放ッて泣く、その背中をどしんと撲つのはおなじく兩眼泣き腫らした共なみだの伯母阿定で。

「御前からして何だねェ」と自分からしてやッぱり同じく。

「おいよ、おいよ、分かッたよ」と太右衛門見當ちがひをする。

それで皆また泣かされる。

いつか阿今のやはらかい手が親父の兩手を緊めつけて居た。

無殘や太右衛門ぞくぞくして、「うひッ、この手が己の娘の手で、この手が己の手で、親の手で、えへッ、おもしれェな」とにこり笑ふ。

「おとッさんや、おとッさん。」

「ほ、ほ、何だいえッ。」

「いけないよゥ、のぼせちゃ。」

「さうかなァ、不思議だな。」

「あれさ、まァ。大變になつたわねェ。あのね、おとッさん。」

「おい。」

「あたしの歹かッたのは勘忍御爲よ。」

「うん。」

「これからはね、あたしもね、可いかえ、よッく御聞きよ。」

「ふム。」

「一生懸命ンなッてね。」

「はい。」

「それで……」

「待ちねェちよいと。何と何うだ素敵だろッ。」

「何がさ。」

「己の返辭がよッ。どうだ、はじめがおいだろ、その次ぎがうんで、それから

がふム、また其つぎが、ええと、はいと來て、取ッ替へ引ッ替へ、素敵だろ。

天子將軍さまが來たッて差しつかへる事ちやねェ、よく覺えときねェ、三味線

にたッて無ェからな。」

泣きながら素直に受けて、「あいよ、分かッたよ。だがね、それだからね。」

「おッと來た、今度ァ何を出さう。」

「ま、可いからよく御聞きよ。あたしもすッかり心を入れ替へたからね。」

「へェ何と入れ替へたッた。」

「ちよッ、いけないねェ。御前にねェ、もう此上は苦勞させないやうに爲るか

ら、どうかね、くよくよ思はないでね。」

「ええ、子でなくッちや可けねェなァ」と又泣かれて又も泣く。

此日昼飯時から其夜十二時頃に至るまで凡そ十二時間の波涙の翻轉、叙述すれば右のとほりであッた。

阿今心から悔悟した。そもそも或ひは遲いか知れぬ。

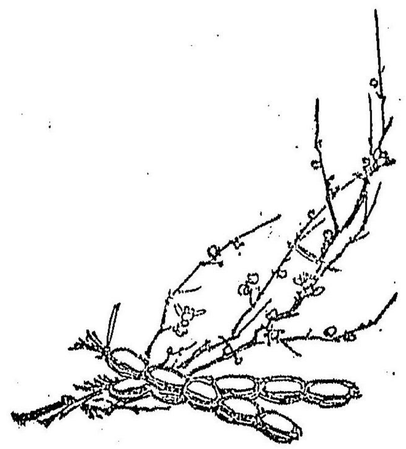
市助持論を執ッて動かぬ。無情か知らん、有情か知らん。

あくる日から病氣ますます募り行くので、是非なく癲狂院へ送られる事になッた、その送られる道道は太右衛門得意の端唄をうたひつづけたとの事で。

阿定何さまへかの日參、阿今目を瞑つて舊の令三の方への詫入れ、市助舞臺で車輪になッて十日毎にはかならず太右衛門の見舞ひをした。

數人の一心終に通じて、およそ半年ほど經ッて、さしもの病氣も愛でたく治ッて、またも氣樂な隱居に戻る、言ふまでもなく市助の家は親類の交際になッた。

可憐狂 終



好義人

美妙

上

此二月三日の宵七時頃、京都禁裏大宮御所の御門外、電燈に映ずる白砂碁ざめて凄く寒さうに冴えわたる處、ぺったりと大地に端坐して御所伏しをがむ老父が有つた。

何ごゝろなく來かゝつたのは電燈巡檢の技手で、且はぎょッとし且は怪しみ、拔き足で樣子を偵ふと、老父たゞさめ〳〵と泣く。

「おかしいな氣ちがへか知ら。それとも又何か思ひつめたのか知ら。何ろ乙な具似まてるぜ。」

つかつかと差し寄つた。

「おい爺父さん、どうしたンだい。こんな所でをかしいぢやねェか、何だッて泣いてなンぞ居るンだい。御まけにさ、此寒いのに地面になんぞ坐り込んで。」

叱るが如く詰問すれは、爺父いよいよ泣き入ッて、「どもつともさまでございます。ですが怪しい者でも何でもございません、どうぞ御見のがしをッ」と云ふだけで咽びかへる。

「これさ、見のがすも見のがさねェも無ェが、唯どうも妙ぢやねェか、第一氣ちげへじみてるぢやねェか。」

「でございますとも。」

「おッれ、さう承知して居て何のこッたな。巡査にでも見られたら面倒だな、な、さうぢやねェか。一躰どういふ譯なンだ。ひと〳〵ほりの事ぢや有るめェ。見りや何も氣ちげへでも無ささうだ。それこそ膝とも談合だ。咄ねェな、事譯を。」

辯からしての江戸見肌、その深切には猶泣かされて老父さばらくは唯ふるへて。

「御深切さまにありがたうございます。御はなし申すのも實は御はづかしい事でございますので、はい。」

「さ、そこが相談だァな。」

「いえ、御はなし申し上げますとも、懺悔とやらの一つでございましやうから、はい。」

さばらくは又言ひかねて居た

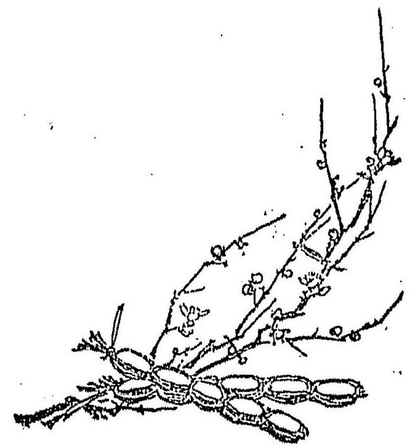
「何を御かくし申しましやう、わたくしはつひ先日まで此京都の監獄につながれて居りました者でございます。」

扶手何と無くぞッとした。

「ふゝ、それぢや何かな今度の大赦に。」

「さ、さやうでございます。飛んでもない御めぐみに預かりまして、もし、

可憐狂 終



欠

MISSING

好義人

美妙

上

此二月三日の宵七時頃、京都禁裏大宮御所の御門外、電燈に映ずる白砂著さめて凄く寒さうに冴えわたる處、ぺったりと大地に端坐して御所伏しをがむ老父が有つた。

何ごゝろなく來かゝつたのは電燈巡檢の技手で、且はぎょッとし且は怪しみ、拔き足で樣子を偵ふと、老父たゞさめ〳〵と泣く。

「おかしいな氣ちがへか知ら。それとも又何か思ひつめたのか知ら。何しろ乙な具似きてるぜ。」

つかつかと差し寄つた。

「おい爺父さん、どうしたンだい。こんな所でをかしいぢやねェか、何だッて泣いてなンぞ居るンだい。御まけにさ、此寒いのに地面になんぞ坐り込んで。」

叱るが如く詰問すれば、爺父いよいよ泣き入ッて、「どもつともさまでございます。ですが怪しい者でも何でもございません、どうぞ御見のがしをッ」と云ふだけで咽びかへる。

「これさ、見のがすも見のがさねェも無ェが、唯どうも妙ぢやねェか、第一氣ちげへじみてるぢやねェか。」

「でございますとも。」

「おッれ、さう承知して居て何のこッたな。巡査にでも見られたら面倒だな、な、さうぢやねェか。一躰どういふ譯なンだ。ひと〻ほりの事ぢや有るめェ。見りや何も氣ちげへでも無ささうだ。それこそ膝とも談合だ。咄ねェな、事譯を。」

辯からしての江戸見肌、その深切には猶泣かされて老父さばらくは唯ふるへて。

「御深切さまにありがたうございます。御はなし申すのも實は御はづかしい事でございますので、はい。」

「さ、そこが相談だァな。」

「いえ、御はなし申し上げますとも、懺悔とやらの一つでございましやうから、はい。」

さばらくは又言ひかねて居た

「何を御かくし申しましやう、わたくしはつひ先日まで此京都の監獄につながれて居りました者でございます。」

拔手何と無くぞッとした。

「ふム、それぢや何かな今度の大赦に。」

「さ、さやうでございます。飛んでもない御めぐみに預かりまして、もし、

赦されました奴めでございます」と言ったばかりで又泣き入る。

技手も何と無く悲しくなって吾知らず目をうるませた。

「で、この眞似は何うなンだ。」

「その事でございます。とても最う二度とふたゝび生きて此婆婆を見ることが出來ましやうとは思ひませんで　何しろ大罪を犯しました身の上、地獄から地獄へまゐる事とあきらめて居りました。さッ、あきらめては居りますものゝ、好いにつけ悪いにつけ、暑いにつけ寒いにつけ、一時でも片時でも娑婆の事を思ひ出さない事もございません。獄屋にも雀や烏の聲も聞こえます、そんなこんなを聞きます度に憑あいつらが羨ましい、いッそこんな藝親父、人間に生まれて來やがらなかッたら畜生め獄道め死にそこないのくたばり損ひめと歯根を噛みめましたのも何度でございましやうか。と申して死なれもせず、やッぱり未練で三度の宛ひ扶持に武者ぶりつきまして一日一日と生き延びて居りました。別世界の事でございますから

世の中の事はちッとも知れません、何氣なく毎ものとほりで居りますと、御上からの御喚出でございます。また何か苦しい目に逢ふ事かと同樣の一同が、後で思へば勿躰至極もございませんでした、口小言を申しまして、出て見ますと、もし貴下、ちッ貴下、休、休、休みだッて一のでございま……」

「行けねェ、泣いちゃ、おい。わからねェやな。」

「だッて貴下これが泣かずにッ。」

「それに去ろ咄しぢやねェか。」

「はい、はい、はい、ちッ。」

「困るなァ、咄す方より泣く方だ。」

「泣きたくはございませんや」と泣く。

「泣きたくはございませんけれど、我慢に我慢するのでございますけれど、ちえッ、畜生めッ、どうした事かッ。」

「おいおいおい、のぼせちやいけねェぜ、ほんとうに。」
「正氣ですッ」と搖頭を掉ッて、「の、ぼ、せま、せん。ですが休みだッてへのでございます。」
「だから何のよ。」
「何のぢやございません、皇太后さまが崩御になッた、其、其、御慈悲のため私ども囚人一同を休ませると云ふ、その御慈悲ッ、うひひひッ。」泣き笑ひするいぢらしさ。
技手も坐ろに涙含む。
「婆婆の方は中々御わかりもありますまい、休みと言ふ其嬉さは彼の中の心もち迚も口で言へるもンでございません。」
「ふム、さうだらうな、自由の利かねェ處だからなァ。」
「ありがたく休みました。すると誰が言ふとも無し、今度崩御の御慈悲のため監獄の囚人を御ゆるしになるとか言ふ御沙汰だと、さァ一同が飛び起

ちました。」
「ぷッ」と技手が失笑せば、
晩めつけるほど熱心に、「いえ、まつたくでムいます。そりや詭言だと言ふものもございます、いゝや眞個だと言ふものもございます、もし然うなつたら何たる嬉しい事か、何年ぶりで乃公は悴に逢へる、いや嗚は嗚白髮になつたらう、どうか一日も快くその御慈悲に逢ひたいものだと樂しみに樂しみに爲て居まして、誰の心も同じやうでございます、休みが過ぎて仕事ど爲つても夫は夫は生まれかはつた程骨吝みせずに働きました。」
「いやはや現金ぢやねェか、急によく働いたからッて何うなるもンぢやねェや。」
「いえ、それが氣の勇みで、引ッ立ちましたのでございます。すると、此卅一日の事で厶います、さッ其卅一日が何とも斯とも言ひやうの無い日となりましたので、それとうとう浮評は虛でもございませんで、貴下、知事

さまや典獄さま御そろひの前に呼び出されまして、ちッ」と又ばらくは咽び入る。

「もつともだ、嬉しかつたらうさ、聞いたばかりでも察するよ。そこで敵兇の事を申しわたされたンだな。」

「ほんとでございましたよ浮評が。」

「大きにな。」

「うそちやございませんでしたよ。」

「なるほどな。」

「まッたくでございましたよ、まア。」

「ふッ、何の事だな、おんなじ事を繰りかへして、わかッてらな、もう。」

「ですが、あなた、その嬉しさ」と五躰の戰慄猶加はる。

「泣いて好いのか笑ッてよろしいのか、是々の御慈悲に因つて貴様たちが勿躰無くも御ゆるしを受けることに爲ッた、どうぞ此上は今までの心をあ

らため、つとめて善心に立ちかへり、折角の思しめしを無にさないやうに爲いと仰せられました時その時ッ、あッあ今から口で言ふやうちやございません。」

「うれしくッてか。」

「さッ、さよでございます。何がなしに唯もう其、前から聞いては居りましても、夫とも夢ぢやないかとまで、吁、生きてふたゝび娑婆の風に當たられる、命を拾つたやうなものだと、唯もう夢中でございました。とッても口では言ひ切れません、御察しを願ひます。」

打ち寄せる波涙の如く涙は物がたりの切所に行く度量を脹らして脹り來る、拔手も手づよく衝動された。

感じ感じて眼をさへ拭つて、「だが御前は好い氣だてだ、同じ嬉しがるにしても然うまで深く心の奥底からして、その涙が千兩だッ。泣きぬェ、好いや、結構だ」と又更に眼を拭つて、

「だが御前闘東らしいなァ。」
「相模のものでございますよ。」
「さうらしいや言葉つきが。で、何かな罪は此地で犯つたのか。」
「さやうでございますよ。」
「悪事つてへのは何なのだ。物奪りか。」
一言深く老父を刺激した。涙の中にも嚴然として、
「そんなのぢやございませんッ。」
「すると何だな」と些しく氣の毒らしく云へば、
「主人のためにでムいます。」
「ふム、主人のために何うしたンだ。」
老父眼中にはかに活火を溢れさせて、「殺つけました悪徒を一人。」
「それぢや人ごろしといふのか。」
「そ、その事でございます。」

技手また重ねてきよッとした。
「なるほど夫ぢや大罪だ。婆婆が見られるか見られぬェかてへのも無理は無エ。まかしな是や聞き事だ。悪徒を殺つけたンだッて。」
「悪徒の何のと申しまして」と老父顔まで赤かめて言ふ、「人間の皮をかぶッた畜生めでございます、恩を忘れて恩人の所へ無理難題を爲かけました奴めでございまして、わたくしも我慢に我慢が出來かねまして、とうとう亂暴な事を爲ましたので。」
「そりや何しろ大した咄しだ。何かな咄しは混み入ッてるだらうね、恐ろしく長く。」
「そりや混み入ッて居りますとも。」
「聞きてエが一寸は咄せめェかねェ。」
「まづ夫は一寸は何うも。」
「大きに夫もさうだらう」と懐中時計を出して見て、「ちよッ彼是八時にな

る。大變だ、役が後れら。ぢや御前、といで刑かれるのは惜しいけれど、乃公も巡檢の用向きで歩いてるンだから自由にや爲らねェ、是非その咄しも聞きてェから明日の朝御前の所へ行かうと思ふ、さしつかへが有るかな。」

「恐れ入ります、さしつかへなんぞはムいませんが、むさい所でございます、一昨日からほんの假に六條魚の棚の安宿に泊ッてをりますので。」

「そりや管やしねェ。何しろ御前の氣だてが剛氣だ。是非聞きてェ。六條魚の棚の何てへ家かい。」

「但馬屋といふ穢い宿で。」

「よろしい、覺えた、きつと行く明日の朝。だが、まかし老父さんや。」

「はい。」

「何しろ御前だッて老年だ。まして牢から出たばかりで、此夜、なんぼ宵だからッて、こんな寒い所にそんな眞似して居たッていけねェや、身躰にも障らァな。よしねェ、早く歸ンねェ、錢が無ェなら遣らァ、鍋飯でも卓

襁でも食ッて煖まッて行きねェ。べらぼうな、大毒だ。あッれ、何だまた泣くのか。」

かぶりを振りながら泣く。

「そのとほり泣いてるぢやねェかよッ。」

「でも、でも……あんまり。」

「あんまり……何だッて。」

「ちッ、あんまりあなたが。」

「乃公が何うだッて。」

「御やさしいのでッ、うひひひッ。」

「つまらねェ事言ッてやがらァ」と闇雲に目を擦ッて、「だがよ老父さん本當だぜ、毒だ、早く歸ンねェ。すこしばかり遣らう錢を。」

蝦蟇口出しかけるのを屹と制めて、「もしそりや宜しうございます、小づかひは持ッて居りますから。御深切だけでもう澤山でございます、どうぞ

本當にそれだけは。」

固く辭まれてなまじひ強ひてとも言ひかねた。

「ンなら止すとまやうわさ。だが嘗だし、又見つともねェし、更けねェ内に歸ンねェ。よッ、悪い事は言はねェから。よッ、これさ、歸んねェッてばよ。」

なぜか親父は無言で泣く。

「どうしたンだ、歸らねェッてへのか。」

親父無言でかぶりを掉る。

「歸るならさッさと早く歸んねェ、乃公だッて決りの付かねェ内は氣がかりだァな。」

「歸ります、歸ります、御深切を無には出來ませんから仰やるとほり歸ります」と聞くさへいぢらしいほど堰き上げて、「今夜こゝへまゐります時には長く斯う地面へ座ッて泣いて居やうとも思ひませんでございました。何

しろ命を御助け下さいました御禮を餘所ながらでも申し上げたく、それに又聞きますれば御尊骸は東京から御着で今日から此御所の中にッ」と言ひあへず又聲を呑む。

拔手また立ちも去りかねた。

「だから何うだッてへンだい。」

「どうだてへのでもございませんが、その方の御庇蔭と思ひますにつけて、ほんの只心ばかり、せめては其御尊骸の御出でなさる所へ向かッて御禮を申し上げたく、やう〳〵日の暮れますのを待ち着けまして、實は此所まで御禮申しに參りましたので、此御所の御門を見ると唯何と無く胸が一杯になりまして、ちッ何うした事やらたゝ悲しく、つひそれで我知らず、御察しを願ひます、氣ちがいじみた眞似までを、さッ夢中に泣いて拜みました。歸ります、あッ歸ります、御深切を無にしては相濟みませんから御言葉に遵つて歸ります。が、どうも此御門が御なつかしくて」と咽び入る。

技手も強くは言へなくなつた。感に撲たれて胸まで躍ッて、

「えゝ、こんな婢人も有るかなッ。」

下

翌四日の午前は交代の休暇なので、前夜の約束どほり技手安田梧一たのしみにして六條魚の棚の親父の所をおとづれた。

いかにも穢い、木賃宿でも下等な方ではあッた。が、應接の情意の濃やかさ、家と人とには不相應な羊羹をさへ買つて留かれて、涙の出るほど忝をらしい。

「そこで昨夜聞きかけた咄だ、是非それを聞きたいのだ。主人のための人ごろしと言ふからにや聞かねエ内から感情が好い。まづ咄して聞かせねエ。これで乃公もね、當歳の時から東京で育つたッたンだけれども、實は此京都には縁が濃いンでねエ、乃公はとのどほり職人だが、親父てへのは奈良の大乘院宮興福寺別當所屬の武士さ。」

「えッ」と親父は目をまろくした。

「何だ、恐ろしくびッくりするぢやねエか。」

「いえッ、それは夫は。扨て何と仰やいます方で。實はその私も興福寺別當の御武士さまには極御懇意を願ひまして、何を御かくし申しましやう、牢へ入るまでの大罪を犯しましたのも全くそのためでございます、どうも不思議でございますなア、その方に御縁の有る方に御目にかゝッて御親切に御尋ねまでしていただきますとはなア。」

「そりや又妙だ、何しろ不思議だ。へエ其ために罪を犯したンだとえ。どうして、ね。乃公の親は安川重光と言ッてね。」

聞きも了らず飛び起ッた。

「ひえッ、安川ッ、そりや大變。」目の色變はる。涙含む。

「そ、その方や娘さまのため。」

扶手また其驚き。

「むム、安川の娘てへのを知ッてるのか、知ッ、知ッてるのか。ありや乃公にや姉にあたる。逢ひたくッても所が知れず、兩親は死んぢまふ、それッきり其まゝさ。知ッてるか、よッ、何處に、達者でか、ど、どうして。」

たゝみかけて慌てゝ問へば、

老父いよ〳〵胸逼ッて、「あッ御氣の毒な事でございます、御存じありませんかなァ、とッくに此世の方ではなァ。」

「ふム、無ェのかえッ。」

老父瞑目してうなづく。

「やれやれそりや飛んでもねェ。どうして死んだンだなァ。聞かせて、よッ早く。何でも可いから洗ひざらひ打ち撒けて。」我を忘れて、進み出る。

「御はなしをするのも御氣の毒な譚でございます。昨晩も申し上げました とほり私は相模の者で　つひ國を出まして京都へ流れ込み、何を爲まして

も思ふやうに行かず、切迫に切迫のつまッた揚げ句、どうどう死なうと決心しまして、或る夜闇を幸に高瀬川から身を投げやうとしました所を、不圖通りがゝりの方に助けられた、其方といふのが安川さまでございます。」

「へえそいつは何と妙だなァ。それから親父と懇意に爲ッたンだね、」

「懇意どころか御世話に爲りましたので、折角わたくしを可哀さうがッて下さいまして、下男に役ッて下さいました。忘れもまゝせん私が身を投げやうとおもましたのは文久三年の師走の廿八日、その時わたくしは廿八、御恩に感じて一生懸命に務めました。あなたさまは其時まだ御生誕にならず、娘さまが丁度御十六で、申し上げては失禮でございますが、大した美人で御出でなさいました。すると、わたくしが上がりましてから間も無く一大事が生きました。叫し下手で、御退屈でございましやうが、どうぞ御聞き下さいまし。」

「退屈どころか親〻の家の叫した。ふム、そこで。」

「外でもございません、申し上げては勿体無うございますが、先帝孝明天皇さま、凛々しい御氣象であらせられまして、刀劍のたぐひを何より御好きでございました。ほのかにそれを伺ひまして諸侯方などからも名刀を献上したいと色々に手を盡くされました事もございましたが、何しろ幕府の勢が凄まじいもので、存じながらも献上の機が叶はなかったのでございます。ところを奥州の津輕の藩主あの弘前侍從が此事を聞き込まれまして、是非に献上したいとの御一念で、御家秘藏の名刀正宗の作を近衛殿の御手から献上の事を願ひました。先帝の御よろこびは實に深く、献上御ゆるしとの事に弘前侍從も身に餘った面目と思し召され、それから元治元年でございます、正月の吉日を擇んで御刀献上となりますと一入の御よろこびでございまして、其四月津輕さまへ御歌が下りました。＝いくとせも愛でなぐさまん名も高き玉のかたなに玉のつくりは。＝さァ其御寵愛一方でございません。ついては其御刀相應な結構な御刀懸をとの思召でございました

が、扨何をどうするとの事に御きまりもムいませんのを、今度御かくれに爲った皇太后陛下さまがそッと御察しに爲りました。ぜひ何かと御考へになりましたところ、先帝さまには鹿を御愛しになる、是は鹿の角のに限る、その鹿ならば奈良の春日のに限る、どうか春日のをとの思しめしでございましたが、さて其春日の鹿は殺生禁斷で、とても其活角を取る譯には行きません。」

「上樣のいきほひでもかえ。」

「やッぱり幕府に對しましてね。すると其御苦心のあるむきを御聞き込みになりましたのは南都大乘院宮興福寺別當さま、皇太后さまには弟御でいらせられます隆芳大僧正、今の男爵松園（尙嘉）さまでございます。興福寺別當といふ御身からは御承知でもムいましやうが、春日神社の御頭で、その御手許の鹿なンぞ何うにでも爲りさうですが、やはりさうも參りませんでね。」

「やッぱり幕府をはばかッてかね。」

「まづさやうでございますよ。すると此大乘院宮さま所屬の武士といふのが彼是八十方もございまして、親御さまも其御一人でございます。いづれも天朝に忠義の心が深く、天朝の御ためとあれば幕府であらうが何であらうが、それこそ火水の中へ飛び込むのをも更に怖れない方ばかりでございまして」とさすが往昔を思ひ出して又も老父は落涙した。

「それでもな、えらいものだな、ふム好い氣象だな、そこで其武士どもが何うかしたのかい。」

「是非生命を抛げ出して、春日の鹿を斫り殺し角を取つて來やうといふのでの。」

「はッあ、武士だッ」と殆ど飛び起つ。

「とうとう安川重光さまが其役を爲さる事と爲りましてね。」

「ふム、あの親父がね、ふム。」

「死ぬ氣で奈良へ行かれました。」

「ちッ、なるほど。」

「夜を見はからッて境内に忍び込まれました。鹿は驚いて寄り付きません。もとより密と爲る事で、追ひまはす譯には行かず、毎晩根よく通ひつゞけ、段々に鹿を手懷けて、とうとう鹿が安川さまへ擦すり付くやうになりました。」

「うム可哀さうに、そいつを斫ったのか。」

「斫るに斫りかねたといふ御はなしで、まかし一大事と心を鬼になさいまして、拔き連ちにきらりと一太刀、美事に御仕どめに爲しまして、生首を取ッて御かへりに爲りました。申すまでもムいません、すぐに立派な生角を大乘院宮さまから皇太后さまの御手許へ獻上になり、とうとう又思しめしどほり美事な御刀かけが出來る事に爲りまして、先帝は殊の外御よろこびに爲らせられました。」

はじめて聞くわが父の手柄ばなし、梧一膝の進むを覚えず、坐ろに涙の出るのも覚えず、のぼせる程に聞き惚れた。

「そりや何しろ嬉しい咄しだ。わが父ながらえらいもンだ。ところで、其事が面倒には爲らなかッたのか。」

頭打ちふッて泣き出して、「面倒になりました。にッくい奴めでムいます。」

「むム、どうしてね。だ、だれがね。」

「下男の仁介めでムいます。永らく私と同じやうに安川さまの御世話に爲ッて居りました奴めでムいますが、滅相も無い娘さまに懸想して居りまして、その彈かれた口惜しまぎれ、ちッ、ちッ、畜生めッ。」

「これさ、悪口は何うでも。筋をよ、これさ肝心の咄しのよ、」

「その人非人の畜生めが、もしその鹿ころしの一條をそッと所司代へ訴人いたしましたわやいッ。」

「む、む、むゥ。」

「さァやかましく爲りました。穏便の沙汰で濟まなく爲る事に爲ッた曉にはそれ勿躰無くも大乗院宮さまの越度となる事でございます。もとより安川さま生命は捨てゝ掛かられた事でございます。」

「ふム、それで。」

「宮さまの御迷惑を無くするのは安川さまの生命一つ。」

「ふム、それで。」

「死、死、ちッ。」

「何ッ、よッ、志ッかりと言つて。はッきりと、志ッかりと。」

「死ねば譯の無い事だと。」

「ふム」

「御切腹でッ」と泣き伏した。

梧一きりきり切齒した。

「ひッ、乃公、親父さん、御前うれしいッ、このとほりだ」と手を合はせて、「ありがッてへよ、さう泣いてくれてッ」とさすがに少焉は言句も無い。

「わかつた、それから此乃公も生まれて人に呉れられる事になつたンだな。」

「さよでございますよ、あなた。宮さま御所屬のほかの武士ども怒つたの怒らないのとそりや一とほりでムいません、見付け次第仁介めをば鱠にしてくれると御さわぎでムいましたが、影も形ちも見せませんので何うする事も出來ず、その内に忘れ形身のあなたさまの御誕生でムいます。御心配のせわか與さま御産の肥立ちが御わるく、とうとう脳い御最期で、その時もくれ〳〵も娘さまの事を私めにッ。」

「よッ、老父さん泣かねエでよ。」

「はいッ、御たのみでムいましたのが、その娘さまも御氣やみからとうとう貴下その暮に。」

「死んだのかい。」

「はい。あなたさまも行く先わからず江戸の衆に賣はれて行ッて御まはひになる、わたくしは全で木から落ちた猿。」

力を入れて、「にッくい畜生、おのれいつか一度怨みを復さずに置かうかッとそれからは唯一念。」

「ありがてへよ」と泣き沈む。

「明治五年の秋でした、通天の紅葉を觀に人でなしめが參りました。わたくしは菓子賣りをして居りましたが、笠を深く被ッた事とて人でなしめが氣が付きません。うぬ逃がするものかと跡を尾けますと、今出川寺町のある家へ入りましたので、すつかりと突き止め、また近所でも聞き質し、その晩とうとう忍び込んで思ひの儘に突き伏せました。さッ是が私の大罪といふ大罪でございます。でも殺した心もちの好さ、勇み起つて自首まました ので、それから色々の御糾問を受け、結句無期徒刑との宣告で、昨日も御咄し申しますとほり監獄に居つゝける身となりました。」

梧一今はその親父が神か佛かのやうに尊くなつて、且は泣き且は拜む。

「ちッ、老父さん、御前はなァ、御前はなァ。」一句一句に聲を呑む、「どう、何と禮言ッて可いか、むム」、ひしげるばかり手を取つて、「これだよ、おいッ、ありがてエやいッ、畜ッ。」

「あたくしも最う死んでも可いッ」と梧一の手をばめかへした。

「親々の引き合はせだ、昨夕あすとで不圖出會ッて、乃公もう御前を、老父さん、他、他人とは爲ねエよウ。」

老父飛び退つて唯つッぷす。

「よッ、是からは世話するよ。どうして此恩人を打遣つておけるものか、畜生ッ、うれしいと悲しいと涙が交代で出やがらァ。」

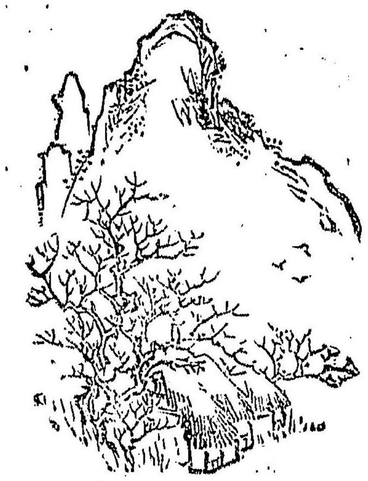
自暴に兩手で目を引ッこすつて、「昨夜聞いただけで奇特の志だと思つたもンで、實は些ばかりの小づけへを今日遣るつもりで持ッて來たンだが、もう斯うなつちや夫どころか、御前の身をば一生乃公が、よ、よ、いいか、其つもりで。」

老父あはや氣も遠くなる。

實情と實情との比べつこ、奇緣不思議につながつて、爾來老父は放蕩、献身犧牲の花はじめて茲に香を吹いた。

好義人

終



明治三十年九月廿一日印刷
同　年九月二十六日發行

實價金拾五錢

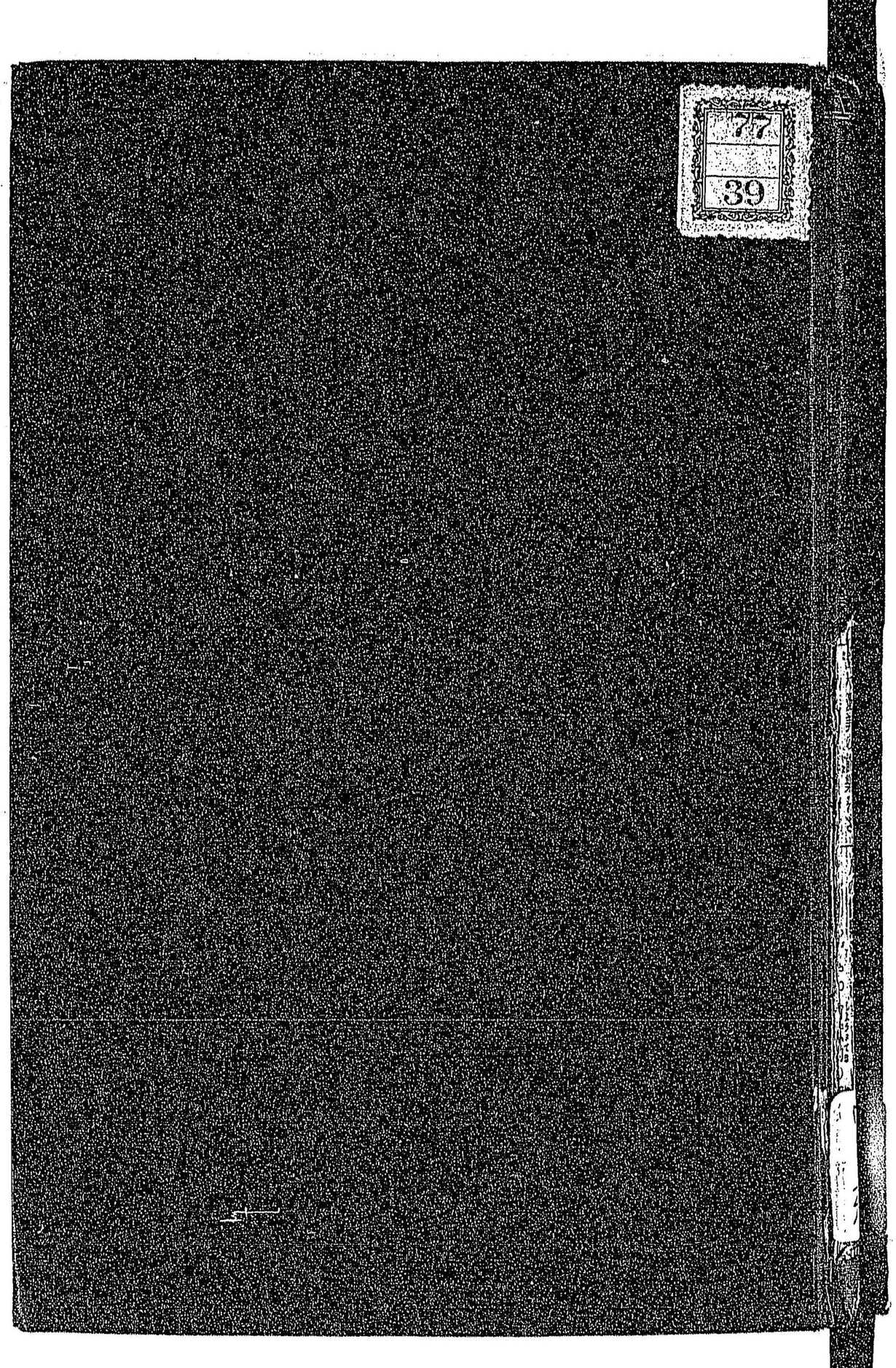
編輯兼發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田篤太郎
印刷者　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目廿三番地　佐久間衡治
發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　春陽堂
（本局電話五十一番）
印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場
（電話本局十九番）

内に發行者の印を捺せざるものは偽物なり

稟告

本書中ゐ丁附の相違せる所あるは少しく異樣の感あるべけれど开は本書調製上の都合あよれるものあれば決して落丁ゐ非ず讀者諸君乞ふ諒し玉へ。

77
39



３１０６２２－０００－０
７７－３９

可憐狂

山田 美妙　著